

Week 1



Future
Learn

Sino-Japanese Interactions Through Rare Books

古書から読み解く日本文化：中国文化の受容

Handout Japanese Version (日本語版)

Week 1

EARLY HISTORY OF PRINTING AND BOOK CULTURE IN JAPAN

日本の出版文化前史

Week 2

ANALECTS OF CONFUCIUS

論語

Week 3

BOOKS IN CHINESE STUDIES - RECOMPOSITION AND CREATION BY ZEN TEMPLES

漢籍の受容 - 中世禅僧による再構築と創作活動

Week 4

BOOKS IN CHINESE STUDIES - FROM MEDIEVAL TO EARLY MODERN JAPAN

漢籍の受容 - 中世から近世へ

WEEK 1: 日本の出版文化前史

EARLY HISTORY OF PRINTING AND BOOK CULTURE IN JAPAN



Activity 1: はじめに

まず、コース全体のテーマを理解してください。また、皆さんをとりまく文化が、どこか別の国や地域から影響を受けているところがないか考えてみましょう。

- 1.1 京都建仁寺よりご挨拶VIDEO (03:35)
- 1.2 あなたの家にある外国語で書かれた本を探しましょうDISCUSSION
- 1.3 東アジアの歴史年表ARTICLE
- 1.4 用語集（第1週）ARTICLE



Activity 2: 東洋の書籍文化と大乘仏教

書籍は、インドで生まれた大乘仏教が古代中国から朝鮮半島を経て日本へ伝来してくることを強い追い風にして、約5世紀に日本へやってきます。

- 1.5 大乘仏典VIDEO (02:19)
- 1.6 中国書籍文化：紙の登場VIDEO (03:23)
- 1.7 ヤマト（日本）への書物伝来VIDEO (03:06)
- 1.8 正倉院ARTICLE



Activity 3: シンボルの複製としての印刷

平安時代の印刷物は、宗教的なシンボルとしての効果を期待して製作されました。

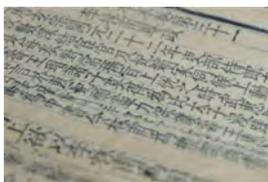
- 1.09 陀羅尼の謎VIDEO (03:27)
- 1.10 摺経から木版印刷へVIDEO (05:48)



Activity 4: 写本の模造としての版本

興福寺の出版本は「春日版」と呼ばれ、平安時代から鎌倉時代に制作されました。写経の文字を模倣した版経は一見すると写経と見まがうほどの見事な出来映えです。

- 1.11 春日版 VIDEO (05:09)
- 1.12 外国人職工の関わりARTICLE
- 1.13 金沢文庫 ARTICLE



Activity 5: 中国の文化をうつす

日本中世の禅宗寺院の出版本を「五山版」と呼んでいます。中国文化の仲介役としての禅僧たちについて見ていきましょう。

- 1.14 禅宗の出版物VIDEO (07:03)
- 1.15 刻工集団の来朝ARTICLE
- 1.16 宗教と書籍DISCUSSION



Activity 6: 実用品としての版本

五山僧は、五山版による学習で培った学力を、寺院での活動ばかりでなく、中国通の知識人として、武家の諮問に答えるなど、世俗の活動に用いていました。ここでも出版が大きな役割を果たします。

- 1.17 五山僧の移り変わりARTICLE
- 1.18 戦国大名による地方版VIDEO (04:49)



Activity 7: 商業出版への助走

日本は、江戸時代にさしかかるところ、朝鮮から活字版印刷技術を学びます。日本の書物出版の発展に、ここでも海外からの職人が大きな役割を果たします。

- 1.19 朝鮮出兵と印刷技術VIDEO (04:26)
- 1.20 活字版印刷VIDEO (07:16)
- 1.21 第1週のまとめ DISCUSSION

Week1: Activity 1 はじめに



まず、コース全体のテーマを理解してください。また、皆さんをとりまく文化が、どこか別の国や地域から影響を受けているところがないか考えてみましょう。

- 1.1 京都建仁寺よりご挨拶VIDEO (03:35)
- 1.2 あなたの家にある外国語で書かれた本を探しましょうDISCUSSION
- 1.3 東アジアの歴史年表ARTICLE
- 1.4 用語集（第1週）ARTICLE

※1.3および1.4は、このPDFに含まれておりません。
各ステップより別々にダウンロードしてご利用ください。

Step 1.1 (Video) 京都建仁寺よりご挨拶

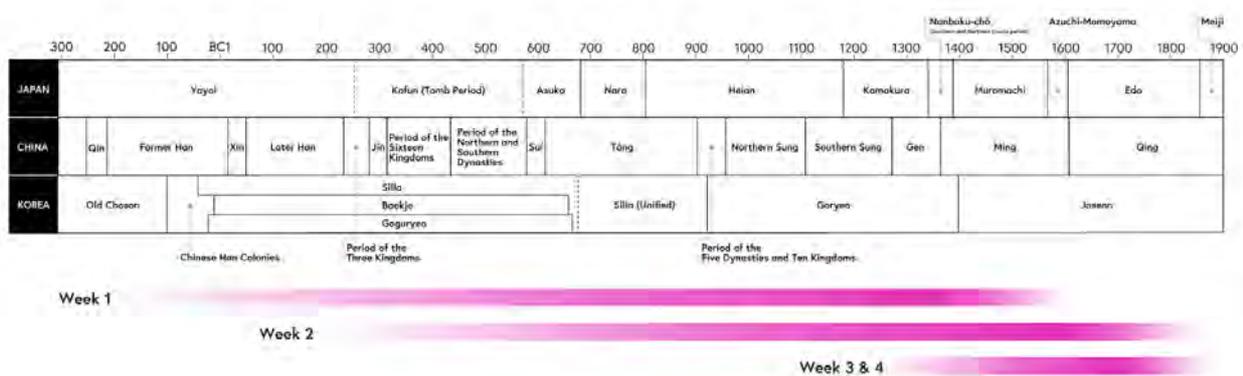


「書籍で読み解く日本の文化：漢籍の受容」（Sino-Japanese Interaction Through Rare Books）によるこそ！

このコースを担当する堀川教授と、第1週の案内役である住吉教授が、京都の有名な禅寺、建仁寺より、皆さんを日本文化の旅へ招待いたします。まずはビデオをご覧ください。

ビデオをご覧になったら、コース概要、担当者紹介、役に立つお知らせなどを記載していますので、以下をお読みになってから、次のステップにお進みください。

コース概要



* より詳細な歴史年表は Step 1.3 をご覧ください

このコースを通して、日本文化が中国を中心とする東アジアの文化の影響を大きく受けながらも、それを巧みに変容させて、独自性を形成していった過程を学んでいきます。

まず、第1週では、上記の年表でも示しているように、5世紀から14世紀までを中心に、日本列島に独自の国家や言語、文化が形成されていく時期に、仏教経典を含めて中国・朝鮮から来た書物がどんな影響を与えたかを考えます。

第2週では、現代の日本においても最も親しまれている中国の古典『論語』に焦点を当て、論語がどのように日本に渡り、日本の文化にどのように影響を与えていったのかを考えていきます。

第3週・4週では、14世紀から19世紀にかけて、漢籍受容の担い手であった禅僧や儒学者たちの研究活動を見ていきます。当時の禅寺は、現在の大学のような役割を担っていました。そこを舞台に行なわれた研究と、彼らが社会に出していった書物の関連性について議論していきます。

また、同時に、この二つの文化の関係が、異文化受容の一事例として、世界史的視野からの検討材料になることに気づいていただけたらと思います。

コース担当者とサポートチーム

このコースは、慶應義塾大学斯道文庫教授で中国文学の専門家である堀川貴史教授が担当します。全4週のうち、第1週は東洋の書籍文化、特に中国文化の影響についての研究を専門にされている、斯道文庫の住吉智彦教授がナビゲータを務めます。第2週は漢籍を研究している慶應義塾大学文学部高橋智教授がナビゲータを務めます。英訳と英語監修は、平安時代の文学を専門としているDr. Gian-Piero Persiani が担当しています。コース開発は、慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター（DMC）と大学院メディアデザイン研究科（KMD）が担当しています。



左から、堀川貴司（ほりかわ・たかし）・住吉智彦（すみよし・ともひこ）、高橋智（たかはし・さとし）、Gian-Piero Persiani

コース中は、慶應義塾大学出版会の安井元規、KMDの宮北剛己、大川恵子教授がサポートします。チームメンバーを「フォロー」して、コース中の私達のレスポンスをお読みください。

大切なお知らせ

- 日本の歴史上の人物の名前は日本のルールに従って表記します。（姓が先、名が後）。
- むやんなど、アルファベットの上に横棒がついている文字が登場します（マクロン、あるいは長音記号と呼ばれます）。これらは長母音を示しています。例えば、むは“おー”、“おう”という発音になります。
- 書名と日本語はイタリックで表記します。
- 全てのビデオ字幕と文章は、英語と日本語の両方で提供します。各週のはじめのステップ（1.1, 2.1, 3.1, 4.1）のDOWNLOAD セクションにPDF ファイルがリンクされています。
- 文中の画像は、“Click to take a closer look” というリンクをクリックすると、大きなサイズの画像をご覧いただけます。
- 特殊な単語やこの分野に固有な単語を、各週毎に用語集にまとめています。Week1は、1.4に、その他は、各Weekの最後のステップに掲載していますのでご利用ください。

- 日・中・韓国の歴史上の時代名については、Step1.3で紹介していますのご利用ください。
- 各ステップを終了したら、次のステップに進む前に、“Mark as complete”のボタンをクリックしてください。

事前調査へのご協力

皆さんの目的やニーズをより正確に理解するために、事前調査にご協力ください。所要時間は数分ですので、お済みでない方は、こちらのURL (<https://goo.gl/fz9qu5>) から回答をお願いします。

コースをアップグレードして特典をご利用ください

コースをアップグレードすると、以下のような特典をご利用いただけます。

コースへの無期限アクセス: FutureLearnのプラットフォームが存在する限り、コース終了後も無期限にコースにアクセスして自分のペースで継続的な学習が可能となります。

参加証・修了証の取得: 条件を満たした学習者は参加証、あるいは修了証を取得することができます。学習成果の証明としてご利用いただけます。

詳細はこちら (<https://www.futurelearn.com/courses/japanese-rare-books-sino/3/upgrade>)

Video Script

0:16

(堀川) こんにちは。ここは京都で最も古い禅宗寺院である建仁寺の塔頭（たちゅう）のひとつ、両足院（りょうそくいん）です。住吉さん、この両足院を開いたのは、西暦1305年から45年もの間中国に留学していた龍山徳見（りゅうざんとっけん）という禅僧ですね。

0:35

(住吉) はい。龍山徳見は、東京の近く、現在の千葉県出身で、鎌倉に移って修業したあと、中国に渡ります。彼はそこで、禅だけでなく、幅広く中国文化を身に付けて、帰国したのが1350年です。そして、その後、京都のこの地で、両足院のもとになるお寺を開きました。

1:02

(堀川) さて、このコースでは、3週にわたって、日本が特に中国からの文化をどのように受容し発展させていったのかを、実際の漢籍を例にとりながら学んでいきます。住吉さんが担当する第1週は、5世紀から16世紀までを対象とします。私は、第3週で、少し重なりますが、それを引き継いで、ちょうどその境目にあたる時期に建てられたお寺ということで、まさに、ふたりの話のイントロダクションにふさわしい場所となっています。

1:40

(住吉) 第1週は、まだ日本という国が出来る前から始まって、奈良時代、平安時代、鎌倉時代と歴史をたどっていきます。そして、東アジアの政治や社会が変化していく中で、中国・朝鮮から来た書物、これは仏教経典を含めませんが、それらの書物がどんな影響を与えたかを考えます。おそらく、書物の輸入は6世紀ごろから途絶えることなく続いてきたと思います。しかし、大きな波としては8世紀前後の遣唐使の時代、そして13世紀から14世紀にかけて、この時代の禅僧たちの往来の世紀が挙げられるでしょう。

2:30

その時代に輸入されたり、日本で出版されたものがここ両足院には沢山収められています。

2:41

(堀川) 遣唐使の時代は、日本の国家の形成に関して非常に重要な時代であるという認識は知られていますが、この13世紀から14世紀にかけての禅僧の時代も、書物という点から見た場合には大変重要ですね。

2:59

(住吉) そうですね。特に大事な点は、中国において既に成熟した出版文化が日本に移植されたことです。

また、16世紀末には朝鮮半島の活字印刷も大きな影響を与えますので、第1週ではそこまでをお話ししたいと思います。

3:21

(堀川) それでは、書物および出版という視点から、日本の古代中世の文化を読み解いていただきましょう。

Step 1.2 (Discussion)

あなたの家にある外国語で書かれた本を探しましょう

それはどんな言語で書かれていますか？なぜその外国語の本を読んでいるのでしょうか？その本は、どのような経緯でご自宅に来たのでしょうか？その本の歴史を知っていますか？あなたの文化にもっとも影響を及ぼした外国の文化は何だと思えますか？

このコースでは、古書を通して、日本がどのように中国文化を取り入れていったのかを学んでいきます。中国文化は日本文化に最も強く影響を及ぼした文化の一つと言えますが、単純にコピーしたわけではありません。中国文化の受容に書籍が大きな役割を果たしています。そこで、皆さんも、まずはご自分の周りで海外の言語で書かれた書籍を通して、身近な文化交流を探ってみましょう。

1. 皆さんの身近にある外国語の本を探して見ましょう。
2. そこに書かれている文字、言語、内容を説明し、なぜあなたがその本を持ち、読むに至ったのかを書いてみてください。また、そこから見える自分の言語や文化と海外の文化との関係を考えてみましょう。
3. その本の写真を撮ってください。（オプション）
4. 本の写真と、それにまつわるストーリーについて、“Padlet”に書き込み、皆さんに紹介してください。Padletとは、写真やビデオや文字などを気軽に書き込み、多くの人と共有できるオンラインのツールです。このPadletボードに書き込みましょう。

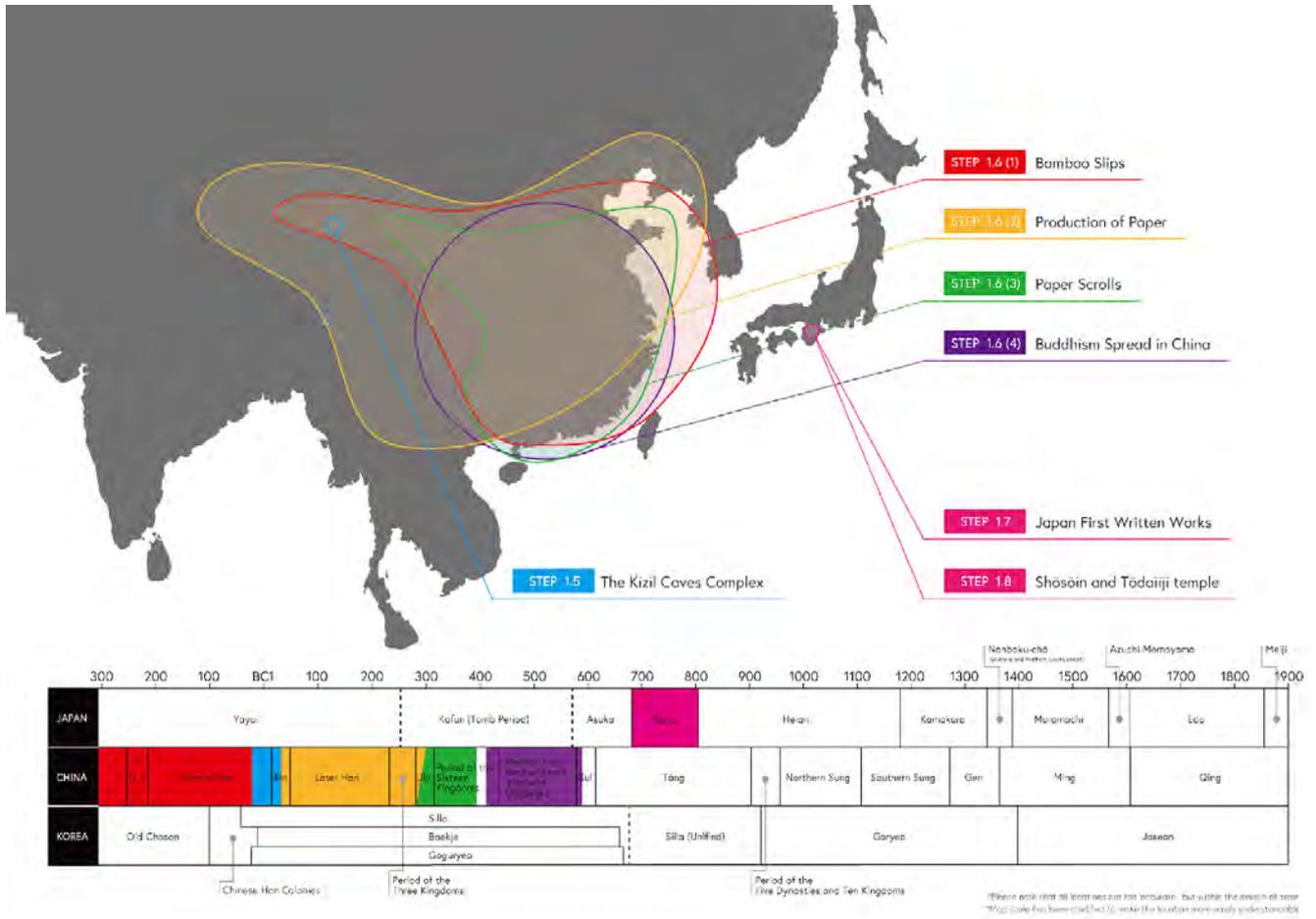
https://padlet.com/fl_keio/book2_1

画面右下にある“+”マークをクリックすると、自分のメモを作成することができます。本の写真もいっしょに貼り付けることができます。使い方はガイドを参考にしてみてください。チュートリアルも役に立つと思います。

- ガイド- <https://about.futurelearn.com/about/faq/social-media-tips/#padlet>
- チュートリアル- <http://padlet.com/features>

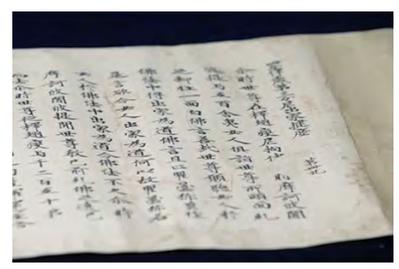
5. ご自分の投稿が終わったら、他の受講者の投稿も是非ご覧ください。どんなことに気が付きましたか？思ったことや気がついたことを、このページの一番下にある“Comments”の欄に書き込んでください。また他の受講者のコメントに返事をしたり、気に入ったものがあれば“Like”を押すのもよいでしょう。

Week1: Activity 2 東洋の書籍文化と大乘仏教

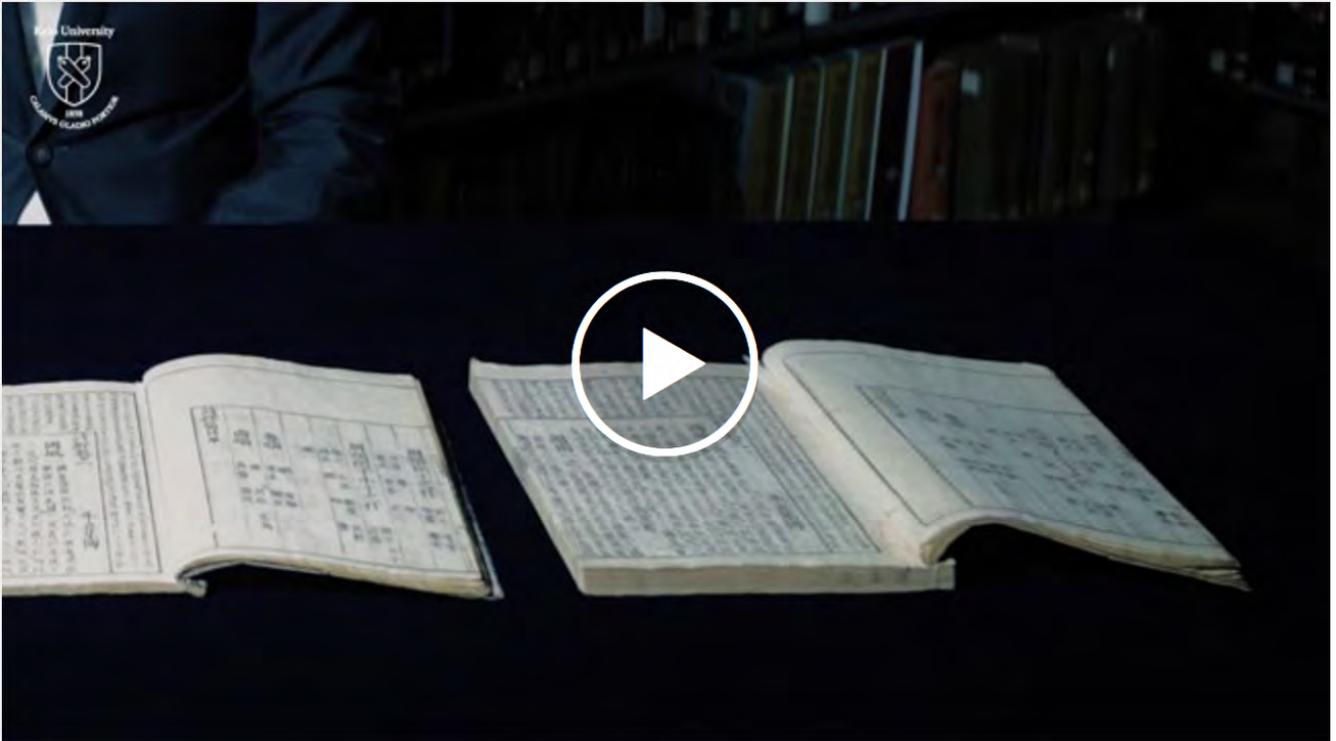


書籍は、インドで生まれた大乘仏教が古代中国から朝鮮半島を経て日本へ伝来してくることを強い追い風にして、約5世紀に日本へやってきます。

- 1.5 大乘仏典 VIDEO (02:19)
- 1.6 中国書籍文化：紙の登場 VIDEO (03:23)
- 1.7 ヤマト（日本）への書物伝来 VIDEO (03:06)
- 1.8 正倉院 ARTICLE



Step 1.5 (Video) 大乘仏典



東洋の書籍文化の来し方を振り返る時、大乘仏典の普及を抜きにして語ることはできません。しかし、本題に入る前に、ビデオをご覧いただき、そもそも本とはどのような役割があるのか？ということについて考えてみましょう。

住吉教授は、江戸時代の初期（17世紀）、中期（18世紀）、後期（19世紀）と、200年の時を超えて出版されたまったく同じ内容の本を例に示して、その意味について語りかけます。

ビデオで紹介された書籍

※詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。

http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.5



「詩経」左：江戸時代後期（1865）・中央：江戸時代中期（1791）・右：江戸時代初期（1664）

※詩経は中国最古の詩集とされ、紀元前11世紀から紀元前7世紀にかけて創作された300以上の様々な種類の詩が収められています。有名なものに花嫁のための詩「桃夭」があります。中国の書籍の内容に関しては、第2週以降で詳しく解説されていきます。

大乘仏教

さて、東洋の書籍文化の来し方を振り返る時、大乘仏典の普及を抜きにして語ることはできません。

西暦の紀元前後にインド北西部で発達した大乘仏教は、中央アジアを故郷とするインドのクシャーン王朝と、東方の後漢帝国（25-220 C.E.）との出会いを背景として、インド世界から中国へと伝わります。この現象を「仏法東漸」といい、世界史上の大事業として記憶されています。(fig.2, fig.3)



Fig. 1. クチャ・キジル石窟寺院 (EXPEDITION SILK ROAD展図録)



Fig. 2. ホータン出土・ロシア科学アカデミー／樺皮写本・法句経 (シルクロード文字を辿って展図録)

それがなぜ大事業であったのかと言えば、単に宗教史の問題のみではなく、その後、東洋の広域に展開する仏教文化を産み出したからです。仏教文化が日本人の生活に、現に様々な影響を及ぼしていることは、言うまでもありませんが、実は、書籍文化もその大きな力を受けています。具体的には、「お経」の普及が、東洋の書籍の発達と流通を、強く促してきました。(fig.3)



Fig. 3. • 取経僧 (シルクロード大美術展・EXPEDITION SILK ROAD展図録)

お経と言えば、何も大乘仏典に限らず、各種の仏典を総称する言葉です。ここに大乘と強調する理由は、大乘仏教が、經典の普及に高い意識をもった教えであったからです。例えば、大乘仏典を代表する「妙法蓮華經」には、その經卷を受持、読誦、解説、書写し供養することが、繰り返し勧められています。大乘仏教は、当初から、經卷を複製するよう信徒に求め、經典を拠り所とする教えの普及を、構想していたのです。そして実際にこの構想は、仏典の漢訳された中国とその周辺で、絶大な効力を発揮しました。

Video Script

0:07

書籍には二つの大きな役割があります。その一つは、移ろいやすい言葉を文字にして束ね、本として定着させることです。これは、人の思いを形にする役割と言えます。もう一つは、その本を複製し、広く伝えることです。これは、人の思いを広げる役割と言えるでしょう。つまり、人の思いをつなぐ仲介役、メディアの一つとすることになります。メディアとしての書籍の特色は、比較的規模の大きな整った本文を、図や文字を使って表象することです。

いま、本の複製ということを申し上げましたけれども、それは決して抽象的なことではありません。ここに三つの書物を用意しました。これらは皆、中国の詩經という古典の日本の江戸時代（1603-1868）に複製したそういう書物です。

1:09

これらは皆、木版印刷で出版された版本ですけれど、左から江戸時代前期、中期、後期という風に長い時間をかけてだんだんと複製をされていった書物です。一見して全く同じ内容を伝えているということがわかると思います。つまり、テキストの仲介役というのは、単に中国から日本へとテキストを伝えてくるということ以外にもこのように、時間を超えてテキストを伝えてゆく、仲介役でもあるといえます。

有史以来、人は様々の書籍を作って思いを伝え合い、各地に固有の文化を育んできました。その中でも、書籍を中核とする文化現象を「書籍文化」と呼ぶことにします。日本列島をとりまく東洋にも、豊かな書籍文化の歴史がありました。

Step 1.6 (Video)

中国書籍文化：紙の登場



古代中国の書物を見てみましょう。紙が発明される以前、書籍は竹で作られていました。

ビデオに登場した中国の時代名

英語字幕では時代名に(*)マークをつけてあります。詳細は Step1.3 「東アジアの歴史年表」をご覧ください。

- 周 (1046-256 B.C.E.)
- 戦国時代 (480-221 B.C.E.)
- 秦 (221-206 B.C.E.)
- 漢 (206 B.C.E.-220 C.E.)
- 後漢 (25-220 C.E.)
- 晋 (265-420)
- 南北朝時代 (420-589)

Video Script

0:04

中国には、仏典の到来以前から、独自の書籍文化が開かれていました。それは、周(*)の時代にも遡る思想や政治の書、占いや暦など各種の文献が、豊かに形成、蓄積されたことを指します。近年は、戦国時代(*)や秦(*)漢(*)の遺蹟から、往時の文献が発見され、話題を呼んできましたが、その実態は簡編、細長い竹製の札を連ねて編んだ品物で、札一本に一行を縦書きし、右から左へと並べる形式です。今日、書籍と言って連想される紙の支えは、漢代以降に現れたものです。

0:51

こちらに、「簡篇」と言われる竹簡の書籍の模造品を持ってまいりました。これは現代に作られた複製の品ですが、だいたいこのような形の書物であったことをお分かりいただけると思います。紙は中国で、紀元前の前漢時代から、物品を包む布の一種として用いられてきましたが、後漢の時代に蔡倫(さいりん)という人物が、書籍を写す材料として改良したとされています。実際の普及は少し遅れるようですが、実物としては晋代、三世の作成と推定される紙の写本が、西域で発掘されています。それは、粗い麻製の紙を横に継いだ形で、簡編以来の巻物の姿を紙上に再現していました。

1:49

後漢から三国時代を経て、南北朝時代(*)に、そうした紙の巻物の書籍が普及していったのでしょうか。それらは初め、宮廷や官庁の周辺で、為政者や知識人に用いられるのみでした。しかし、紙の書籍が行われ始めた時期は、正しく「仏法東漸」の年代に当たります。自らの書写を求めた大乘仏典は、インドや中央アジアでは椰子の葉、樺の木の皮を綴った姿でしたが、中国での漢訳に当たって紙の巻物に作り替えられ、さらに複製されていきます。仏の慈悲は、王侯貴族から一般の人士に及び、各地の庶民にも広がっていきました。

2:46

そうして紙の書籍は、大乘仏教の伝播とともに、中国社会に深く浸透します。さらに仏教と民衆の教化を競った道教も経典の整備を急ぎ、儒経の注釈書も、その数を益していきます。ここに書籍が教えを伝え、教えが書籍を増やす、相乗的な循環が起こりました。この新しい紙本墨書の器には、宗教文献だけでなく、歴史や文学の書、辞書や百科全書なども盛られることとなり、写本による書籍文化の新段階をもたらします。

Step 1.7 (Video) ヤマト（日本）への書物伝来



中国の書籍文化はどのようにしてヤマト（日本の古代の名前）に伝来したのでしょうか？初めの書物はだれがどのように日本の社会で受け止めたのでしょうか？住吉教授の解説を聞きましょう。

ビデオで紹介した書物



Fig. 1. 四分律 (740)
 詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。
http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.7

ビデオに登場した時代名

英語字幕では時代名に(*)マークをつけてあります。
 詳細は Step1.3 「東アジアの歴史年表」をご覧ください。

- 中国：南北朝時代 (420-589)
- 中国：隋 (581-618)

- 中国：唐 (618-907)
- 日本：奈良時代 (710-794)
- 日本：江戸時代 (1603-1868)

ビデオに登場した人物

英語字幕では人名に(#)マークをつけてあります。

Step 1.4「用語集 (第1週)」も合わせてご覧ください。

- 聖徳太子 (574-622)
- 藤原光明子・光明皇后 (701-760)
- 聖武天皇 (701-756)

さて、あなたの国や地域の場合、文字文化のはじまりは、いつごろどのようなものでしたか？分かる範囲でコメント欄に書き込みをしてください。

Video Script

0:04

中国の南北朝時代から隋(*)唐(*)の間は、宗教と写本盛行の時代です。ヤマトの人々の思考が、文字の光で照らし出されるようになったのは、ようやくこの頃でした。韓半島からの渡来人が携え、遣隋、遣唐留学生が追い求めたのは、すでに完成期を迎えていた、この時代の巻子の写本です。例えば、日本の書籍史の幕開きを告げる原本の一つに、聖徳太子(*)自筆と伝えられる御物、法華義疏の手写本がありますが、それは、中国とインドの思考が融合した、東洋書籍文化の明らかな反映でもあるのです。

0:50

奈良時代(*)までに、日本の書籍文化は、大乘仏典の奔流を受け止めることで、その歩みを始めたことができます。ここに一卷の経典・経巻をお示ししていますが、これは日本の奈良時代、天平12年、聖武天皇(*)の妃であった藤原光明子(*)が書写をさせた一切経の一卷です。本体は、奈良の正倉院に今は収納されています。この内容は四分律(1)という、大乘仏教ではなく部派仏教のある一派の宗教生活上の規則を整理した書物です。

1:42

こういう書物の様式というのは八世紀の東アジアに流通していた唐(*)の時代の、中国の書物の姿をそのまま複製した、そういうものだといえると思います。そしてその内容はインドから中国を経て、朝鮮半島や日本に伝わってきました。そういうものが大和の人々の思考をとらえていった。そういう実際の証拠になっているという風に思います。一方で隋唐以降、中国の書籍文化は、再び自らの創意で新たな局面を切り開きました。その創意とは、出版の発明と書籍の印刷です。出版印刷は、書籍の役割のうち、本文を普及する方面について、かつてない大きな効力を発揮します。大乘仏典が、この新たな複製法に強く結びついたことは、言うまでもありません。奈良時代以降の日本人は、この動向にも機敏に反応して行きました。

2:51

この週では、東洋の書籍文化を背景とし、江戸時代に出版文化全盛を迎えるまでの前史を、東アジアの、人の交流を取り上げながら説明します。

Step 1.8 (Article)

正倉院



正倉院 © Keio University

このコースでは、隋唐時代（7-8世紀）に作られた中国の書籍が、日本に運ばれ模倣された事実を、実際に伝わる書籍の原本を通して紹介しています。

各ステップで扱う事例は、私たちに、東洋の書籍文化を知るための、強い示唆を与えてくれるでしょう。それは、古代の書籍が現代まで伝わるという事実そのものが、日本の、そして東アジアの書籍文化の一端であるからです。そうした書籍や一群の文物は、ある宝庫の存在に拠り、保たれてきました。この奇跡の宝庫は、広く「正倉院」と呼ばれています。

正倉院という名称は、正倉を主要な施設とする院区、収蔵庫を置いた区画という意味で、奈良時代に、官署や大寺などの各所に作られた。しかし現在は、奈良時代の正倉が今日まで遺された稀有の存在である、奈良東大寺の正倉院を指す呼び名として使われている。正倉院は、奈良時代の天皇家と政府が蒐集した文物を、今日に伝える貴重な機関である。

今日では、その正倉院を、日本国政府の管理する体制がとられている。具体的には、内閣府に帰属する宮内庁正倉院事務所が、倉庫の遺構と収蔵品の管理を行っている。これは正倉院の宝物が、聖武天皇や光明皇后の遺品を始め、皇室ゆかりの品々を数多く含んでいることから、明治政府の重んずる所となったため、早く明治8年（1875）までに官有とされている。

このような現状は、東大寺がもと聖武天皇の発願によって造られ、国の営んだ寺院であったことに起因し、奈良時代（710-784）の日本が、仏教への信仰を国家経営に取り込み、統治の力として用いたことを背景とする。

正倉院の宝物には、古代以来の伝世品に加え、20世紀になって国の管理下に置かれた品物も含まれる。東大寺の尊勝院という支院の、聖語蔵という蔵に保存されていた大量の経巻がそれで、光明皇后や称徳天皇、光仁天皇ゆかりの一切経を含むという特色がある。

さて、正倉院の建物は、校倉造りとして知られる高床式の収蔵庫で、気温と湿度の変化から長く宝物を護って来た。現在、宝物は新たに建造された収蔵庫に移されているが、もと置かれていた倉内の区画によって資料の性格が異なることから、北倉、中倉、南倉という区画によって整理され、呼び分けられている。

正倉院の宝物としてよく知られるものは、天平勝宝8年（756）聖武天皇の崩御に際し、数度に分け光明皇后によって奉納された北倉の名品で、天武天皇以来伝わりの皇室の財を収めてきた樺製の厨子、唐や新羅から輸入した書画や衣料、唐朝との通交によって得た西域風の琵琶(fig.1)など、ユーラシアを貫く交易路を通じ運ばれてきた品々が含まれる。



Fig. 1. 正倉院／五絃琵琶（平成三年 正倉院展図録）

北倉の宝物にも若干の書籍があり、例えば聖武天皇筆写の雑集、光明皇后書写の樂毅論など、自筆の書巻は、奈良時代盛期の書籍文化をよく体現している。また中倉の遺品ではあるが、初唐の文人王勃の詩序(fig.2)を収めた書巻は、日本でも流行した宮廷文学の手本となり、仏教經典以外の書物としては日本で最も早く、慶雲4年（707）までに写されたものである。その姿を見ると、色替わりの麻紙に独特の筆法で記された書の作品であり、則天文字を用いた文字資料としても貴重とされる。



Fig. 2. 宮内庁正倉院事務所／詩序(1-4)

中倉の蔵品には、大量の古文書類を整理した書巻や、その断簡などで、奉写一切経所などと呼ばれる、写経のための機関で使用した文書の集積があり、一般に「正倉院文書」と呼ばれている。東大寺に置かれた写経所は、国家事業としての仏教經典の書写を行う行政機関であり、その文書は一種の公文書に当たる。これを分析すると、当時の写経事業や官署運用の様子がわかる他、文書の用紙が、他機関の公文書を再利用したものであったことから、奈良時代の行政を知るための、貴重な資料となっている。

中倉および南倉のその他の宝物は、東大寺の創建維持に関わった役所である、造東大寺司関係の品々と、幡や衣裳、伎楽面など、大仏開眼の供養、聖武天皇の葬儀といった、奈良平安時代の東大寺の儀礼に使われた用度品を保存したもので、ペルシャ製のカットグラスなどの名品も知られる。

さて、正倉院中倉伝来の文書には、宮廷の主導で一切経の書写がいく度も繰り返された事実が知られる。この一切経とは、当時手に入る全ての仏教經典を集めた、5000巻にも上る一大叢書である。その成果の一部が実際に、東大寺尊勝院の聖語蔵に遺されていた。上述のように、現在はこれも正倉院の宝物に含まれる。

聖語蔵経巻には「光明皇后御願経」または「五月一日経」と呼ばれ、天平12年（740）5月1日の願文を伴う、光明皇后発願書写一切経の大半を含む他、神護景雲2年（768）に発願された「称徳天皇勅願経」以下、奈良時代中後期に作られた、多くの一切経の一部を伝えている。本コースの講義で紹介した、斯

道文庫収蔵の四分律や、慶應義塾図書館の大方広仏華嚴經卷14(fig.3)は、これらの聖語藏經卷の一部が、早くに民間に流出したものである。

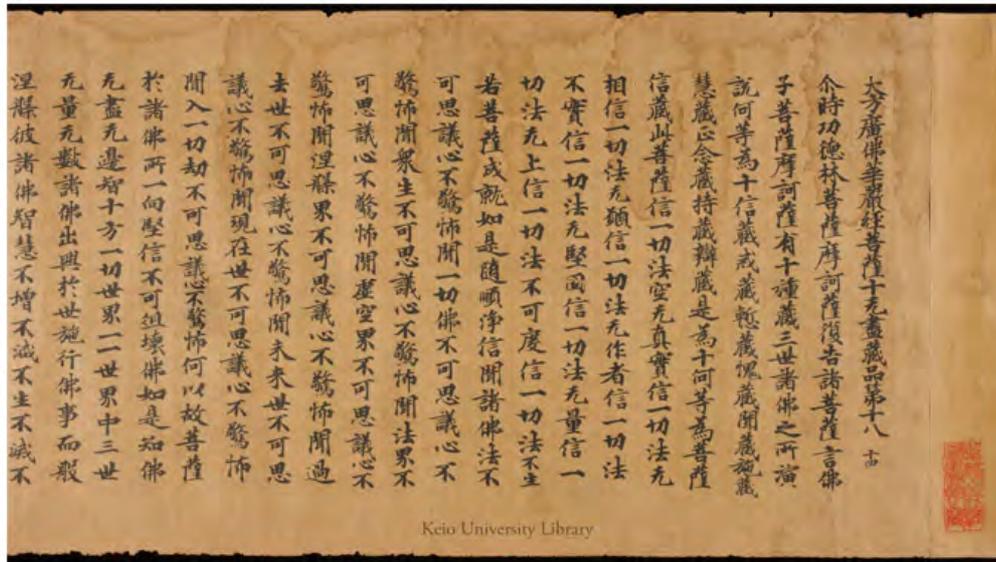


Fig. 3. 大方廣佛華嚴經
 詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。
http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.8

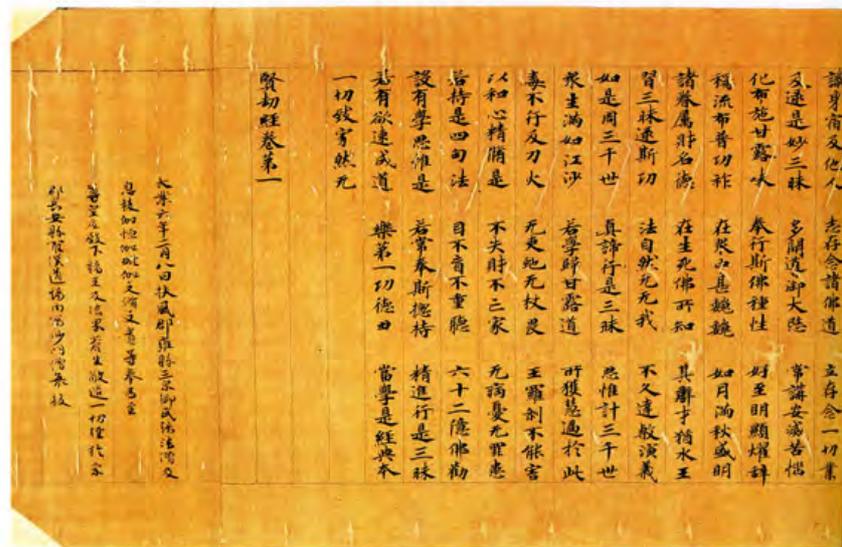


Fig. 4. 正倉院聖語藏／隋大業6年写本・賢劫經（平成七年 正倉院展図録）

また幸いなことに、聖語藏經卷の中には、奈良時代の写經の親本とされた、中国隋唐時代の古写經数点も含まれており、隋大業6年（610）書写の賢劫經(fig.4)、唐写本の四分律などが、その実例として挙げられる。これらは、敦煌など西域発見の出土文献を除けば、7-8世紀に当たる隋唐時代の、中国の書籍の実態を伝えた、無二の資料と言えるであろう。

さらに、のちに聖語藏に増加された平安時代の經典の中に、刊年を明記したものとしては日本最古の出版物である、寛治2年（1088）刊行の、春日版の成唯識論(fig.5)があったことは、日本の出版史にとり、極めて重要な証言となっている。

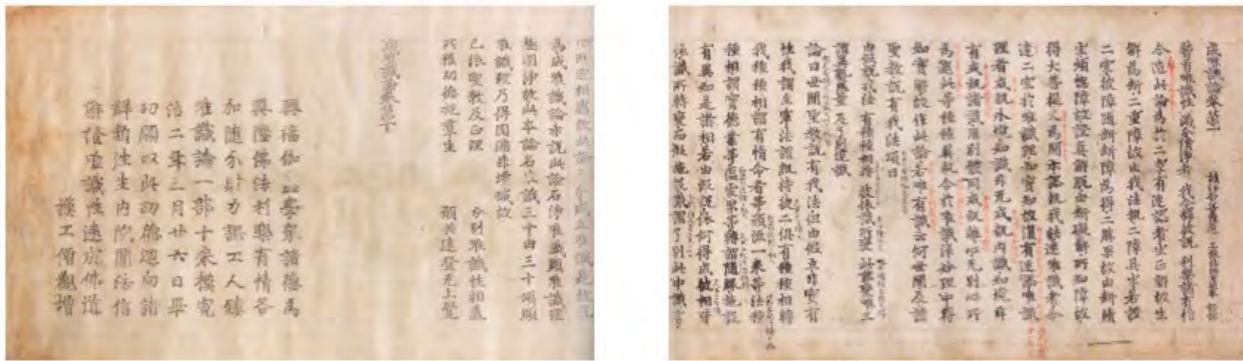


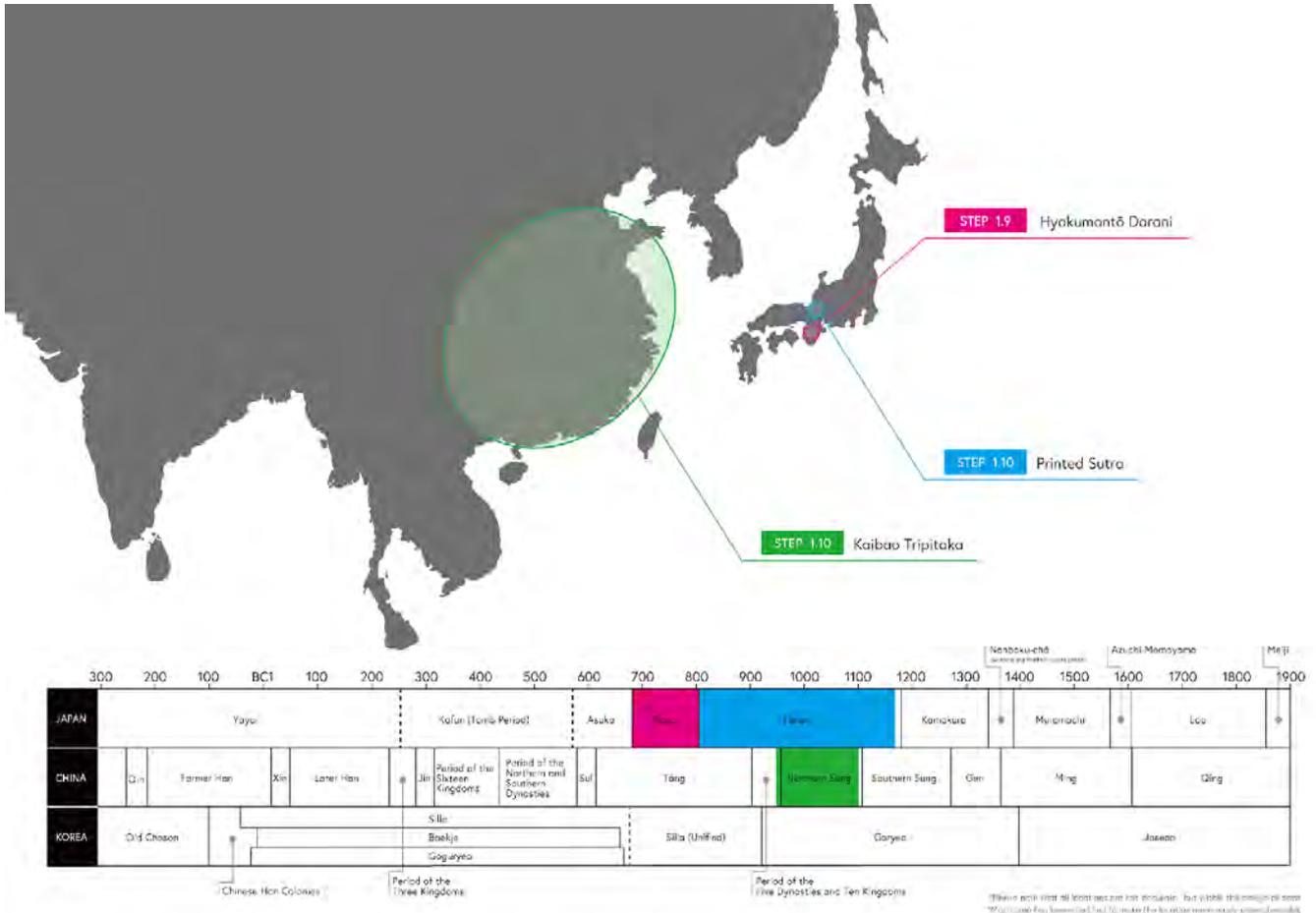
Fig. 5. 『成唯識論』（春日版）寛治刊本・宮内庁正倉院事務所（左：巻十）（右：巻一）

このように正倉院には、日本の古代や、中国では中世に当たる7-8世紀の文物を始め、貴重な典籍が長く集積され、東洋の書物の実態を、伝世の品々によって目の当たりに知るための、多くの原本資料が保存されている。そしてその背景には、仏教東漸という文化現象の、強く働いていたことが看取される。

関連情報

- **正倉院**
正倉院の公式ウェブページです。
<http://shosoin.kunaicho.go.jp/en-US>
- "正倉院文書の世界～写経のできるまで" (PDF,日本語)
国立歴史民俗博物館の研究成果を記した面白い読み物です。
<https://www.rekihaku.ac.jp/exhibitions/project/old/141015/img/shakyou.pdf>
- 国立歴史民俗博物館発行・歴史系総合誌「歴博」第185号
詳細な写真情報などを使い、正倉院について詳しく紹介しています。
<https://www.rekihaku.ac.jp/outline/publication/rekihaku/185/witness.html>

Week1: Activity 3 シンボルの複製としての印刷



平安時代の印刷物は、宗教的なシンボルとしての効果を期待して製作されました。

- 1.09 陀羅尼の謎VIDEO (03:27)
- 1.10 摺経から木版印刷へVIDEO (05:48)



Step 1.9 (Video) 陀羅尼の謎



百万塔陀羅尼は、世界最古の印刷物とされていました。これが作られた背景は？また、はたして本当に最古の印刷物なのでしょうか？住吉教授の解説をお聞きください。

ビデオで紹介された資料



百万塔陀羅尼・奈良時代
詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。
http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.9

Video Script

0:04

奈良時代後期の神護景雲四年、恵美押勝の乱を平定した称徳天皇は、鎮護国家を祈念するため、無垢浄光大陀羅尼経の導きに従って、百万の木製三重小塔を作り、奈良の諸大寺に奉納します。その塔心には、一片の陀羅尼が納められていました。陀羅尼とは、仏法護持の力をもつとされた呪文で、漢訳仏典中に、インドの言葉の音を、漢字で写したものです。無垢浄光大陀羅尼経には、陀羅尼を書写することの功德が記されてい

ますが、現在、法隆寺に伝わったその実物を見ると、高さ5cm大の紙片に印刷されたものです。これらの遺品を一般に「百万塔陀羅尼」と呼んでいます。

0:57

こちらには、法隆寺から流れ出まして、斯道文庫で保管しております百万塔陀羅尼の塔と陀羅尼のセットの実物がございます。塔身と、塔の内部でこの相輪塔の部分が外れるようになっていまして、この中に、こちらの刷り物を収納していました。今これは、裏打ちをして伸ばしていますが、もとはくるくる巻物のように巻いて、この中に収めてあったというものです。中身が印刷されたものになっています。

1:47

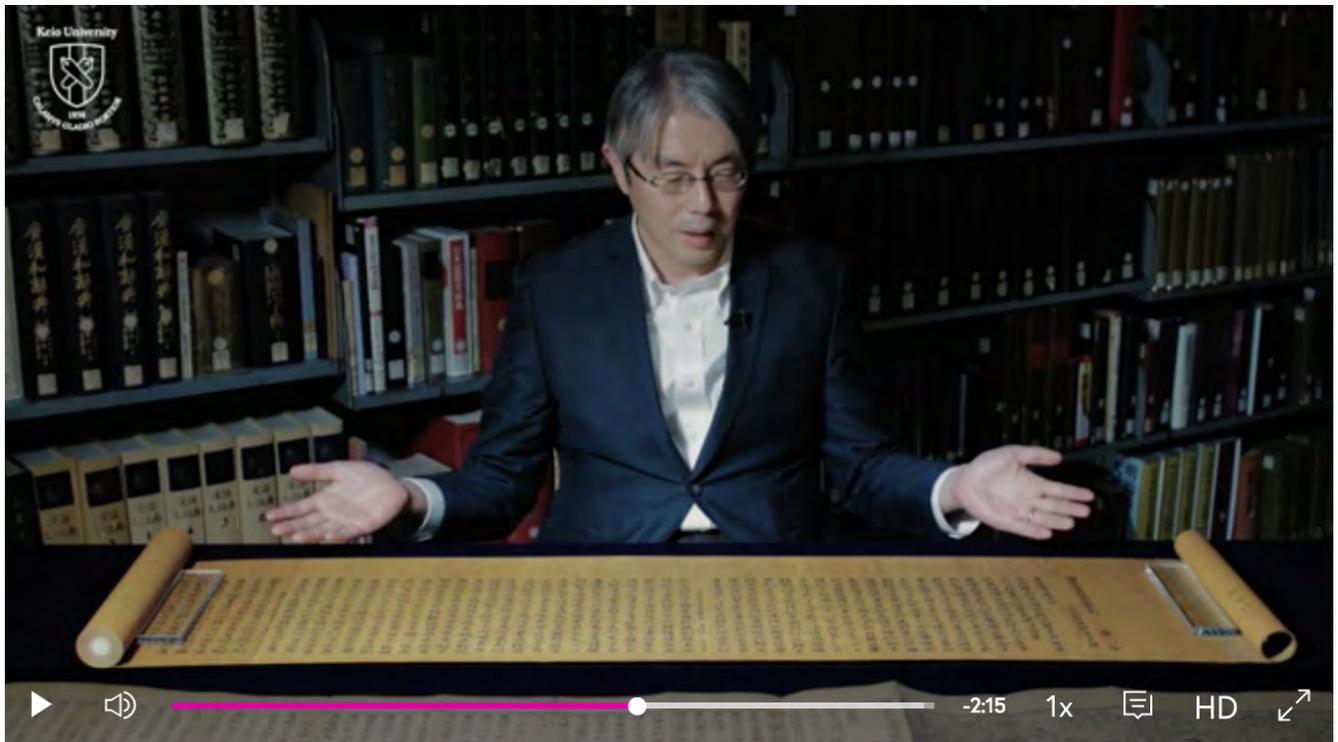
百万塔陀羅尼は、印刷年が東大寺要録の記事によって知られるため、世界最古の印刷物とされてきましたが、今日では、さらに建立の古い、新羅仏国寺の釈迦塔に納められた、無垢浄光大陀羅尼經の印刷本や、中国は西域出土の版經に、より早い成立の可能性が認められています。また隋代成立の華嚴經の注釈書中に、經文の印刷を思わせる記述があり、いずれも7～8世紀に、中国周辺で仏經の印刷が始まっていたことを窺わせます。

2:36

百万塔陀羅尼の印刷方法は、従来論争の種となっており、木版か銅版か、また版を固定し印刷したか、紙を固定し版を押しつけたか、などの議論が続いています。その性格を考える上で指摘したいことは、短い呪文を万の単位で複製するためにとられた、特殊な方法によっているだろうという点です。

それは、後世の版本のように、複数の版木を連続的に使用したのではなく、それぞれ独立した内容の版木を、個別に繰り返し用いるという方法です。印刷に用いる版木を、古くは「形木」と称しますが、形木には、衣服の文様の刷り出しに用いた実例があり、仏の小像を繰り返し刷った、印仏の工夫にも近いものと思われれます。

Step 1.10 (Video) 摺経から木版印刷へ



平安時代には(794 - 1185), 写経だけでなく、印刷物である摺経（すりぎょう）が制作されるようになります。この新しい技術はどのようにもたらされ、広まっていったのでしょうか？資料を見ながら考えて見ましょう。

ビデオで紹介された書物

詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。

http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.10

- 佛説仁王護国般若波羅蜜經 1239
- 妙法蓮華經・平安時代

ビデオに登場した人物

- 裔然（ちょうねん）(938-1016)：宋に留学していた平安時代の日本の僧侶
- 太宗皇帝（たいそうこうてい）(r. 976-997)：北宋時代の2番目の皇帝

ビデオに登場したキーワード

- 写経（しゃきょう）
- 摺経（すりぎょう）
- 法華経（ほっけきょう）
- 阿弥陀経（あみだきょう）
- 版本（はんぼん）
- 開宝蔵（かいほうぞう）
- 折本（おりほん）

Video Script

0:04

百万塔陀羅尼の印刷以降、200年以上の空白を経た平安時代中期、日本の文献に出版印刷を示す記録が現れてきます。当時の貴族の日記中に「摺經」などが見えるのがそれで、藤原道長の御堂閑白記や、その他の公家日記には、法華經や阿弥陀經などを刷って仏事に奉納したり、親族の安産を祈願したりする記事が見えます。平安時代後期になると、公家の仏事にまつわる祈願文にも、奉納品として「摺經」の文字が見え、写經の他、数百から千の単位で、摺經の作られたことが知られます。

0:52

仏經の奉納は、經文の記述から見ても、写經を供えるのが本来の姿ですが、数の多さによって帰依の深さを示す意図から、摺經も併せて採用され、平安貴族の経済力によって、それが実現されました。

現在でも稀に、平安時代後期の製作と目される妙法蓮華經などの印刷本が伝わっています。このような木版による印刷本を版本と呼びますが、これらの版本を見ると、写本さながらに、長巻の複製された様子が知られます。これは百万塔陀羅尼以来三百年の間に、出版印刷が大規模かつ複雑化し、長大な本文を支えるための、版木の連続的な使用という工夫に達していたことを伝えています。こうした実情は、平安時代前期に、記録に現れない継続的な発展があったことを示すのでしょうか。

1:46

こうした変化は、むしろ具体的なきっかけにより起こったのではないかと思います。例えば、寛和二年入宋僧裔然（ちょうねん）の帰国に伴う宋版大藏經の輸入などは、相当の影響をもったのではないのでしょうか。東大寺出身の僧、裔然は、成立後間もない宋朝に涉り、天台山などの聖地を巡礼した後、太宗皇帝に招かれ、首都汴京を訪れました。

2:27

折しも太宗は、史上始めて、木版による大藏經の作成を命じ、開宝年間に完成したばかり、異国から訪ねてきた高僧にこの「開宝蔵」一セットを賜りました。五百箱に上る開宝蔵の摺本を携えた裔然の帰朝は、多くの見物人が出るほどの評判となり、当時の平安京を湧かせます。こうした宋版本の輸入が、日本の書籍文化を刺激し、長巻の摺經を製作させたのかも知れません。

3:14

ここに太宗皇帝が作らせた、初めての木版大藏經であります開宝蔵の複製品を示してあります。開宝蔵の遺品は非常に少なく、世界でも稀です。斯道文庫には所蔵がありません。そこで現在の中国で作られた複製品で説明しますが、このように卷子本の版本として作られました。この分が版木1枚、この分がもう1枚という形で紙一枚に版木一枚が相当するという作り方で印刷をしています。これは北宋時代の、中国でも非常に古い版本の一つです。こちらにはもう少し後の時代、宋代の版本の大藏經の実例を示してあります。こちらは本物です。

こちらはすこし後の時代になると思いますが、版画の仏像が最初に示してあり、これから述べられるお経の世界が示してあります。

4:33

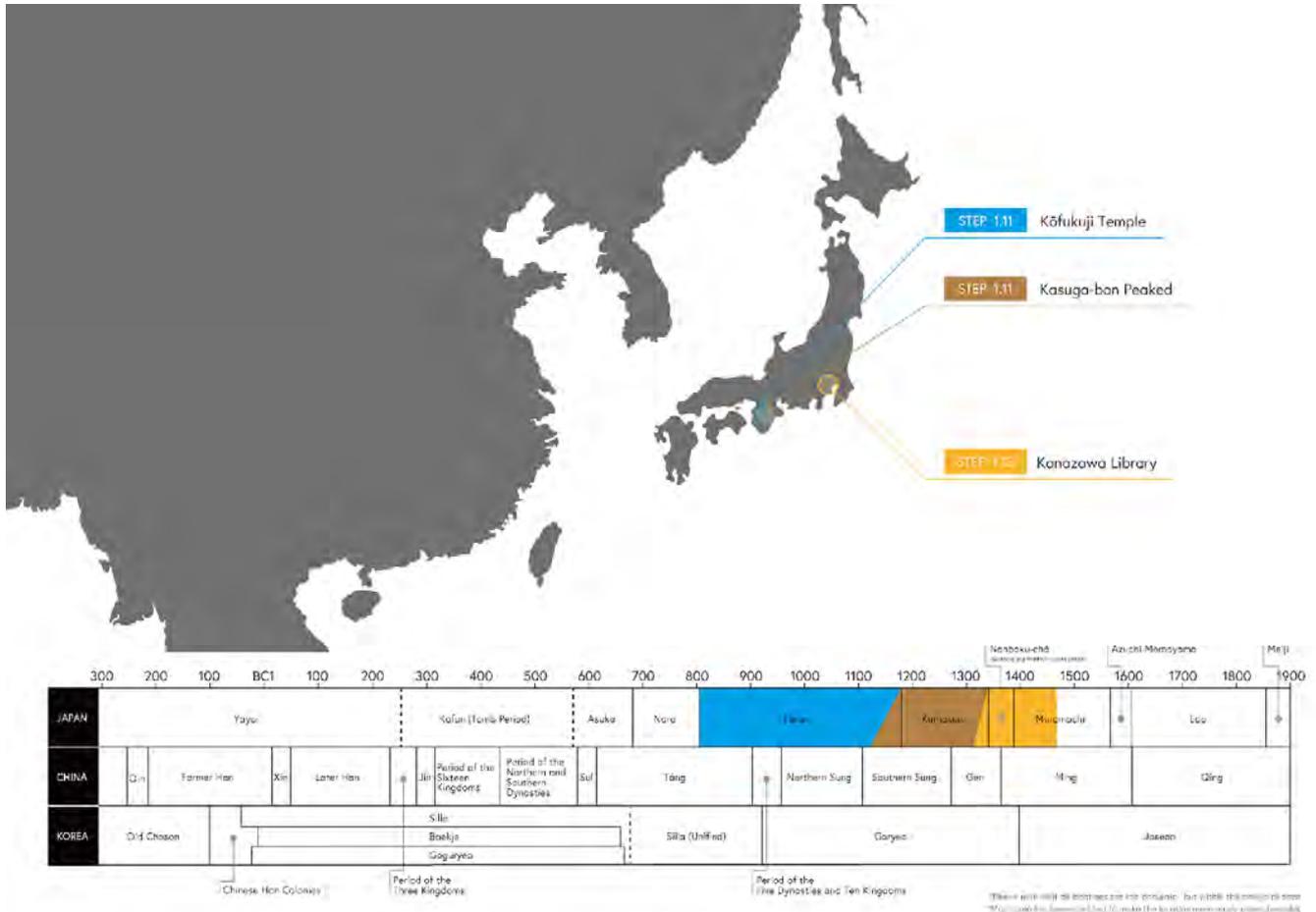
版本の中身は、このような山折りと谷折りを繰り返す、折本の形で印刷されています。これを収納しますと、このような長方形に変わりますので、これが元々のインドのヤシの葉っぱのお経の形に非常に近いというところから、仏教の世界では非常に好まれた装訂です。

このように、日本では、古代の終焉を迎える平安時代中期頃、本格的な出版印刷が始まりました。しかし、その用途は、書籍と言えど読むことを前提とする現代とは、異なっていました。

5:40

当時の版本は、仏教の呪術や儀礼を行うための用具であり、宗教的なシンボルとしての効果を期待して製作されました。このような状況を変えたのは、次に述べる奈良興福寺の出版活動です。

Week1: Activity 4 写本の模造としての版本



興福寺の出版本は「春日版」と呼ばれ、平安時代から鎌倉時代に制作されました。写経の文字を模倣した版経は一見すると写経と見まがうほどの見事な出来映えです。



- 1.11 春日版 VIDEO (05:09)
- 1.12 外国人職工の関わりARTICLE
- 1.13 金沢文庫 ARTICLE

Step 1.11 春日版



興福寺の出版本は「春日版」と呼ばれていますが、この春日版の出版はどのようにはじまり、平安時代・鎌倉時代の社会にどのような役割をはたしていったのでしょうか？

ビデオで紹介された出版物

(※) 詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。

http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.11

1. 成唯識論（巻1・巻10）
2. 成唯識論述記（春日版）平安時代（※）
3. 大般若波羅蜜多經
4. 法華義疏
5. 十七条憲法
6. 華嚴經
7. 三論玄義
8. 成唯識論（春日版）木版・鎌倉時代（※）
9. 表無表色章（唐招提寺版）正応5年（※）
10. 表無表色章版木（唐招提寺版）正応5年
11. 大般若經・版本

ビデオに登場した神社仏閣

- 興福寺（こうふくじ）
- 春日大社（かすがたいしゃ）・興福寺の境内に位置する
- 法隆寺（ほうりゅうじ）
- 東大寺（とうだいじ）
- 西大寺（さいだいじ）
- 唐招提寺（とうしょうだいじ）

ビデオに登場した歴史上の人物・

- 玄奘三蔵 (602-664)：中国の僧
- 聖徳太子 (574-622)
- 藤原家：平安時代に力を持っていた一族

ビデオに登場したキーワード

- 法相宗（ほっそうしゅう）
- 春日版（かすがばん）
- 和様（わよう）
- 界線（かいせん）ビデオの4:43あたりで説明あり

Video Script

0:04

興福寺と言えば、玄奘三蔵の流れを汲む、法相宗の学問寺ですが、世俗との関わりでは、平安貴族の主流をなした藤原氏の氏寺として繁栄しました。藤原氏の仏事に関わった興福寺では、摺經の製作を行い、出版の技術を蓄積していきます。そして、平安時代の後期から、法相宗の教義の研究に必要な論書を出版し、教学への活用を行うようになりました。具体的には、玄奘の翻訳した成唯識論(1)や、その注釈書である成唯識論述記(2)などを刊行しました。

0:50

興福寺の出版本は、土地神である春日大社に奉納した後世の習慣から「春日版」と呼ばれていますが、この春日版は、読むための書籍出版として、日本の出版史に大きな画期を成します。

春日版の刊行は、鎌倉時代になっても益々盛んで、貞応嘉禄年間には、大蔵經中随一の規模をもつ、大般若波羅蜜多經(3)六百巻を出版しています。

1:21

これらの版経は、写經の文字を模倣した和様と呼ばれる刻字により、界線などはなく、一見すると写經と見まがうほどの見事な出来映えです。

興福寺には、平安末鎌倉初期以降の春日版の版木も多数残存しており、そこにはしばしば「摸工僧」「彫師」などの肩書きで僧侶の名が刻まれています。彼等は寺院所属の職工僧であり、建築や調度の作成と並び、經典の出版印刷を職業として、寺院に奉仕する存在であったようです。

鎌倉時代の仏教界は、新興の宗派が次々と生まれたことで知られていますが、

2:07

新仏教に刺激を受け、奈良仏教も復興の季節を迎えます。その際、重要な役割を果たしたのが、春日版を先駆けとする、諸寺院の出版事業でした。例えば、法隆寺では、開基となった聖徳太子の著作である法華義疏(4)や、十七条憲法(5)などを出版しました。東大寺では、華嚴經(6)や三論玄義(7)など、奈良仏教の基礎となる經論を刊行します。西大寺や唐招提寺など、律宗の寺院でも、重視する經論や、祖師の著作を出版しました(8)。

ここに春日版の關係の出版資料を用意していますが、まずこちらの板に文字が彫られたもの、こちらが奈良のお經の版木の実物です(9)。

3:05

これが中世にさかのぼる実例と言えます。このように三十行から三十数行のテキストを一面に彫ってあります。これは表裏両面に彫ってあります。それから、ここに唯識論九巻の一というように文字が彫ってありますが、こちらは文字が浮かび上がるように、左右が逆になるように印刷用に彫ってあります。こちらは字の部分の彫り下げて、刷るのではなくて見てすぐわかるように彫ってあります。こちらは版木を管理していく寺院のなかでの必要な情報として彫ってあります。こういうものをたくさん藏の中に立てて重ねると摩擦で字が丸くなってしまおうので横に立てて並べて保管しています。

それからこちらは、春日版と同系統の大般若経の版本です(11)。

4:18

このように金銀を散らした装飾的な表紙を使っていますが、最初の口絵に続きまして大般若経の本文もあたかも筆で書きましたように、肉筆の雰囲気を感じながら、印刷をしています。この銀色に光って見える線は界線といますが、印刷したものではなく、後から引いたものです。ただ全体として、写本のように見える。この場合は特に装飾写本のように見える、そういう効果を期待して印刷されたものだと思います。

Step 1.12 (Article) 外国人職工の関わり

奈良の出版興隆は、畿内の周辺寺院にも波及していきます。

その中には平安新仏教の大寺も含まれていました。例えば高野山では、建長5年（1253）、金剛峰寺の僧快賢が、祖師空海の初作である三教指帰を皮切りに、十住心論(fig.1)、性霊集や、空海の信奉した大日経疏などを、立て続けに刊行しました (fig.2)。



Fig. 1. 秘密曼荼羅十住心論, 1254-9
詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。
http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.12



Fig. 2. 「秘蔵宝鑰」の木版／高野山宝物館（空海からのおくり物展図録）

また、写本時代に仏教界の王座を占めた比叡山延暦寺では、長く出版を行っていませんでしたが、鎌倉時代後期に至り、僧承詮が出て、法華三大部およびその注疏記六種一五〇巻の出版を、弘安二年から永仁四年（1279～96）の十八年間にわたる大事業の末に達成しました。（fig.3 はその中の1冊です。）



Fig. 3. 叡山版・止観輔行伝弘決
 詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。
http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.12

この叡山版法華三大部の刊行では、出版彫刻の際の原稿となる「版下」作成者二十八人の名が判明します。その中には「大宋人盧四郎」という、宋出身の帰朝者も含まれています。実はこの時期、中国では、徳祐二年（1276）に、南宋の首都臨安がモンゴル軍に攻め落とされ、宋朝の滅亡に向かっており、ことさらに「大宋人盧四郎」と名乗る盧氏は、宋からの亡命者であった可能性があります。同様の来航者としては、永仁五年（1297）作成の古文孝経の古写本に見える、宋銭塘吳三郎入道という人物が知られます。吳氏は京都の博士家周辺で、盛んに漢籍の筆写を行っています。このように、日本中世の書籍文化を尋ねると、来朝した外国人職工の関わった事例を見ることができます。

新興の宗派でも、例えば浄土宗の一門は、平安時代の浄土教以来の著作を、鎌倉時代前期からいち早く刊行しています（fig.4は今に残るその木版）。新しいメディアへの対応は、旧仏教よりも迅速かつ積極的に取り組まれ、承元四年（1210）には源信の往生要集が刊行されたと伝えます。これは事実とすれば、日本人の著作を刊行した、最も早い事例に当たります。また鎌倉時代末期の元亨元年（1321）には、浄土宗を大成した法然房源空の黒谷上人語灯録を出版していますが、これは日本語仮名交じり文の書籍出版として、最も早い事例です。

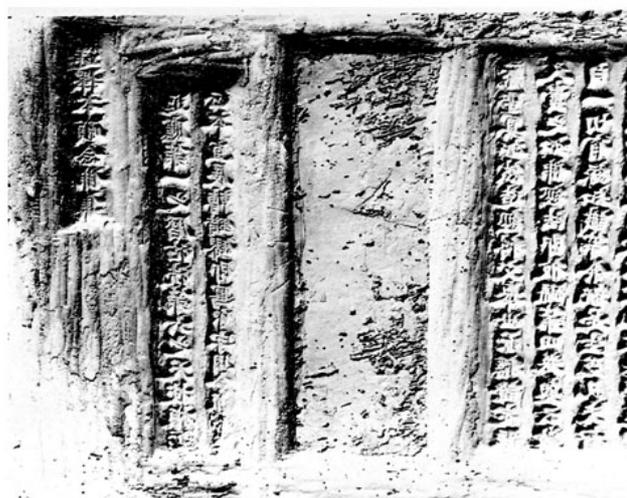


Fig. 4. 知恩院／選択本願念仏集

様々な書籍の装訂

このように、鎌倉時代を中心とする中世前期には、奈良や畿内一円の大寺院で、継続して書籍の出版が行われるようになりました。その書目はやはり仏典の範囲内ですが、シンボルとしての経巻の複製から、宗門の教科書や祖師の著作を取り上げるように変わり、読みかつ学ぶための書籍とされたことが、各伝本に加えられた朱墨書入の様子からも一目瞭然です。

中世前期の版本を見ると、主要な経典は伝統的な卷子本(fig.5)か、それを一定の幅で交互に折り畳んだ形の、折本(fig.6)の体裁をしています。

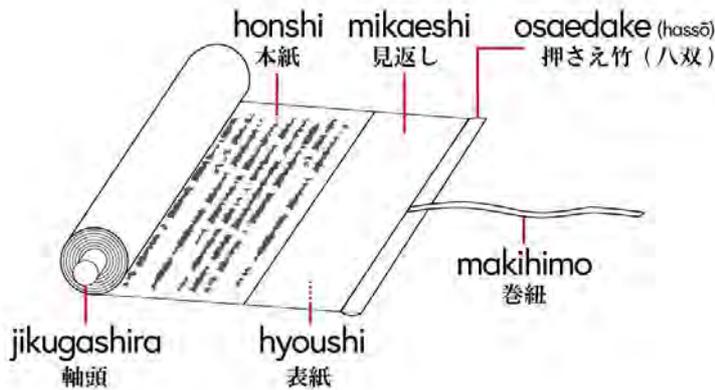


Fig. 5. 卷子装 (かんすそう)



Fig. 6. 折本 (おりほん)

しかし経典の注釈書や、経典に基づいて祖師達の展開した論述書は、後に主流となる冊子本の形ともされました。冊子本は元来、本経に対する副本や、当座の記録用に使われていました。それが、目当ての場所をすぐに開けられる機能性、携帯に適した利便性により、次第に書籍の典型となっていきます。この時代には、その萌芽を見ることができわけですが、とくに見開き裏表の一紙ごとに、のどの部分に糊をさして紙を継いだ、粘葉装(fig.7)の版本が多く作られています。



Fig. 7. 粘葉装（でっちょうそう）

しかもそれらは、紙の表裏に文字があり、複雑な配置を行って、両面摺りとした形です。わざわざ両面摺りとした背景には、和様写刻の文字と相俟ち、両面に書写された冊子写本の再現という意図が見てとれます。総じて平安時代以来、中世前期までの日本の版本は、写本の模造を目指したものだだと捉えることができます。この状況を変えたのは、鎌倉時代末期に勃興した、禅宗寺院の出版でした。

ここで説明した装訂や、和本の紙、絵入り本等に関して詳しく学びたいかたは、慶應義塾大学のもう一つのFutureLearn コースである「古書で読み解く日本の文化」（**Japanese Culture Through Rare Books**）で詳しく解説していますので、ぜひ受講してみてください。

<https://www.futurelearn.com/courses/japanese-rare-books-culture/>

Step 1.13 (Article) 金沢文庫



金沢文庫「称名寺」浄土式庭園 阿字ヶ池

© Keio University

このステップでは、日本における古代以来の写本の伝承と、中世となって伝わった中国出版文化が、ぶつかり合うようにして出来た歴史的な蔵書、「金沢文庫」について説明し、日本における出版文化成立の背景について探っていきます。

金沢文庫は、日本の「文庫」文化を知る事例としても、極めて重要です。文庫とは、ある特定の知識人、または知識集団を支えた、活動的な情報集積施設の名称です。文庫とはいったい、文化史の上でどのような役割を果たして来たのでしょうか？

金沢文庫の場合、その活動の発端は、天皇を中心とする京の公家たちから、中世に自立を始めた鎌倉の武家のグループが、公家の築いた文化的資源に学ぶ、という目的のために開かれて行きました。

日本の中世前期、12世紀末に鎌倉に開かれた武家の幕府は、将軍職を奉じた源氏の棟梁を中心として関東の武士が結束し、京の公家に対抗し得る権力を手にしたが、当初、文化の領域では、専ら公家に学ぶことから素養を培った。

源氏の後継者が途絶え、その親族であった北条氏が、幕府内における勢力の扶植に成功、京から招いた武力のない公家将軍を担ぎ、執権として武家を率いるようになると、その係属から多くの幕閣が登庸され、幕政の全般を北条氏が指導することになった。特に公家将軍の接遇と儀礼の運行は、公家文化を摂取する必要を、幕府に生じさせた。

鎌倉時代中期、北条時頼、時宗政権の下でこうした重責を担った人物こそ、北条実時（1224-76）その人である (fig.1)。彼は武蔵国六浦庄（現横浜市金沢区）を所領とし、庄内の金沢の地に自邸を設けたことから、その子孫は金沢北条氏と呼ばれている。



Fig. 1. 神奈川県立金沢文庫／北条実時像（武家の古都 鎌倉展図録）

実時は学問を好み、公家流の学問を摂取するために、儒教の經典を読む明経道の博士、清原教隆に師事して漢学を研究し、一方でわが国の、漢文の古典である本朝続文粹や、和文の古典である古今和歌集、源氏物語のテキスト蒐集にも手を染めた。そして、長く幕政の第一線に立っていた実時は、経世の学を重んじ、博士家の訓法を通じた漢籍の解説に、次第に傾いていく。その結果として、博士家の伝えた古代以来の転写本をさらに写し、詳細な訓法と注釈を記録した。

これらのテキストを漢籍旧鈔本と称し、具体的には実時作成の、春秋経伝集解や群書治要の鎌倉時代写本が、今日に遺されている(fig.2)。こうした学問の結果、その臺本として書籍が集められ、蔵書が形造られたが、金沢北条氏の蒐集は、世代を超えて一大蔵書に発展し、後世、金沢文庫と呼ばれるようになった。そして、平安時代以前のテキストが多くは伝わらない今日、金沢文庫本の多くは、それぞれの書の最善本、最古本となっている。



Fig. 2. 宮内庁書陵部／群書治要巻16（左：巻尾・右：巻首）

また実時は、私的には仏教を信仰し、自邸内に阿弥陀堂を造立して仏に供養を施した。この堂舎は称名寺に発展し、老師の審海を招いて、真言律宗の寺院とされた。この称名寺は、後に金沢文庫本の伝来にも、大きな役割を果たすことになる。

金沢北条氏の子孫である顕時、貞顕、貞将は、実時以来の学問を継承し、幕閣としての地位を維持、三代目の貞顕は、短期間ではあるが執権職を帯びるに至った。これに伴い、金沢文庫の蔵書は増加の道をたどり、和漢の典籍、特に漢籍の全般にわたって書目が累積していった。貞顕が六波羅探題として京に勤務した経験は、法曹類林や侍中群要など、公家流の実務の書や、たまきはる（建春門院中納言日記）などの文藝書を、文庫に導き入れる機縁となった。

さらに特筆すべき現象は、この間に中国から、新しい宋刊本が多くもたらされたことである。例えば宋孝宗朝（1162-89）刊行の尚書正義、宋嘉定9年（1216）興国軍学刊本の春秋経伝集解など、唐末五代の混乱を経て、宋朝に新たに校訂されたテキストが、日宋間の貿易船により、遠く鎌倉まで運ばれていた。これらの宋版の伝来が、日本の為政者の知識を変革し始めていたのである。

宋版伝来の影響は、もっとも端的には、多様な書目として現れた。金沢文庫本を見渡すと、経史の古典に加え、子部の類書や医書、集部の宋人の文集などが収蔵に加わっている。

類書とは、百科全般に及ぶ古典のダイジェストで、天子の読書を支える書籍の小宇宙とも言える。写本時代から大部の編集が試みられてきたが、例えば宋の太宗のために編まれた巨大な類書、太平御覧1000巻は、出版事業の拡大にともない、宋代に何度か刊行されている。金沢文庫にはそのうちの、慶元5年（1199）頃の刊本が収蔵された。また宋末の版本ともなると、巨大な編集書の構造を可視化する、編題の強調や文字の大小の使い分けといった、印刷面の視覚的工夫も加わっている。

医术と医書の普及も、出版業と知識人の増加に直接関わった現象で、外臺秘要方や様々の医書が、金沢文庫本の宋版に含まれる。薬学の基礎となる動植物、鉱物学書の図註本草には、図入りの版本が行われ、これも同じく文庫に収蔵された。

伝統的な儒教の経典でも、南宋刊行の論語註疏などは、論語の注と、注の二次的注釈である疏を、一覧できるように合刻したテキストであり、こうした注疏の合編本は、写本の時代から存在したものの、宋代になり、版本として様々な分野に普及した形式である。

金沢文庫本の宋版は、その出版地においても、内陸部の蜀（四川省）本、沿海部の浙（浙江省）、建（福建省）本が、いずれも複数種含まれており、日宋貿易の中国側の拠点であった浙江省を超え、宋末の中国における書籍流通の広さを、そのまま体现している点も見逃せない。

中国で成立していた、これら宋版の内容上の特色には、テキストの整理校訂、大型化、可視化、集約化などの諸点を指摘できる。金沢文庫本は、そのいずれの事例をも包み、中世の日本と、それを取り巻く東アジアの学問世界を、凝縮したかのような内容を備えていたのである。ここに、古代以来の旧鈔本に宋刊本が加わり、それぞれの書籍を基盤とする2つの潮流がせめぎ合った、日本書籍史の中世を象徴する様相が現れている。

宋版の蒐集と参考は、公家の学問では極めて限定的であったと言え、金沢文庫本は、後世に武家の学問が飛躍する素地を準備したと言える。しかし版本の本格的な使用は、やはり北条氏が鎌倉に扶植した、禅宗寺院の学問興隆に待たなければならなかった。

さて、金沢北条氏と歩みを共にした称名寺 (fig.3) は、審海の後、鈔阿、湛睿と学僧を輩出して、真言律宗の大寺となっていた。彼等は、当時新たに仏教学を興隆させていた奈良の地と関わりをもち、称名寺を関東仏教学の拠点とした。

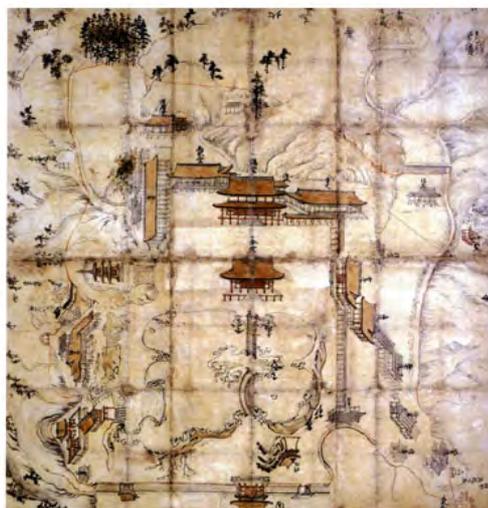


Fig. 3. 神奈川県立金沢文庫／称名寺結界図（武家の古都 鎌倉展図録）

こうした教学の基盤として、福州版の宋版大蔵経が寄進され、円種のような入宋僧が、宋版の教学書を輸入し蔵書に加えていく。また歴代の学僧は、経論の注釈や解義という形で研鑽の結果を著し、自らも書籍を産み出した。真言密教の秘儀伝授も、秘法と儀礼の細則を書物に托し、聖教と呼ばれる仏教典籍群を形成する。

鎌倉時代の奈良の地は、当時の出版印刷の先進地であり、こうした事業も、称名寺や周辺の寺院に波及し、仏典の版本が経蔵に加えられた。

これらの称名寺収蔵は、本来の金沢文庫とは歩みを異にするものであったが、元弘3年（1333）鎌倉幕府が滅亡すると、金沢貞顕は執権北条貞時とともに自刃、貞顕の子の貞将も戦死を遂げた。これに伴い金沢文庫は、称名寺の接管管理する所となり、称名寺聖教と共に伝えられた。

しかし金沢文庫本は、上杉憲実や北条氏政、豊臣秀次、徳川家康、前田綱紀といった、学問や書籍に関心を寄せた武人によって庫外に持ち出され、室町時代以降、近世に四散してしまう。その結果、多くの伝本が失われた一方、足利学校遺蹟図書館、国立公文書館内閣文庫、名古屋市蓬左文庫、前田育徳会尊経閣文庫、宮内庁書陵部図書寮文庫など、近代に成立した日本の主要な文庫に、それぞれの収蔵を代表する善本として引き継がれている。

なお現在では、称名寺に残ったわずかな例外の他、散佚の前に捺された「金澤文庫」の印記を検出することで、ようやくその旧蔵であることが判明する。これは、文献学における印記判別の重要性を示した、好例とも言える。

さて、金沢文庫の活動が停止した後、日本における書籍蒐集の主役の座は、鎌倉時代に、来朝僧の指導を得て力を蓄え、宋元明代の中国大陆に雄飛した、禅僧達の手へ渡された。彼等は中国近世の出版文化に存分に親しみ、やがて日本の、知識の世界を変革していく。しかし前代の業績を受けその端緒を開いたのは、この金沢北条氏の活動であり、突然その幕を閉じることになった金沢文庫の収蔵書は、いまもなお、日本書籍史の支柱であるといつてよい。

今日の金沢文庫



現在、称名寺に遺された金沢文庫資料は、神奈川県立金沢文庫において管理し、展覧に供されている。

<http://www.planet.pref.kanagawa.jp/city/kanazawa.htm> (日本語)

また宮内庁書陵部図書寮文庫に伝来した金沢文庫本の漢籍は、デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」において、全文の閲覧が可能である。

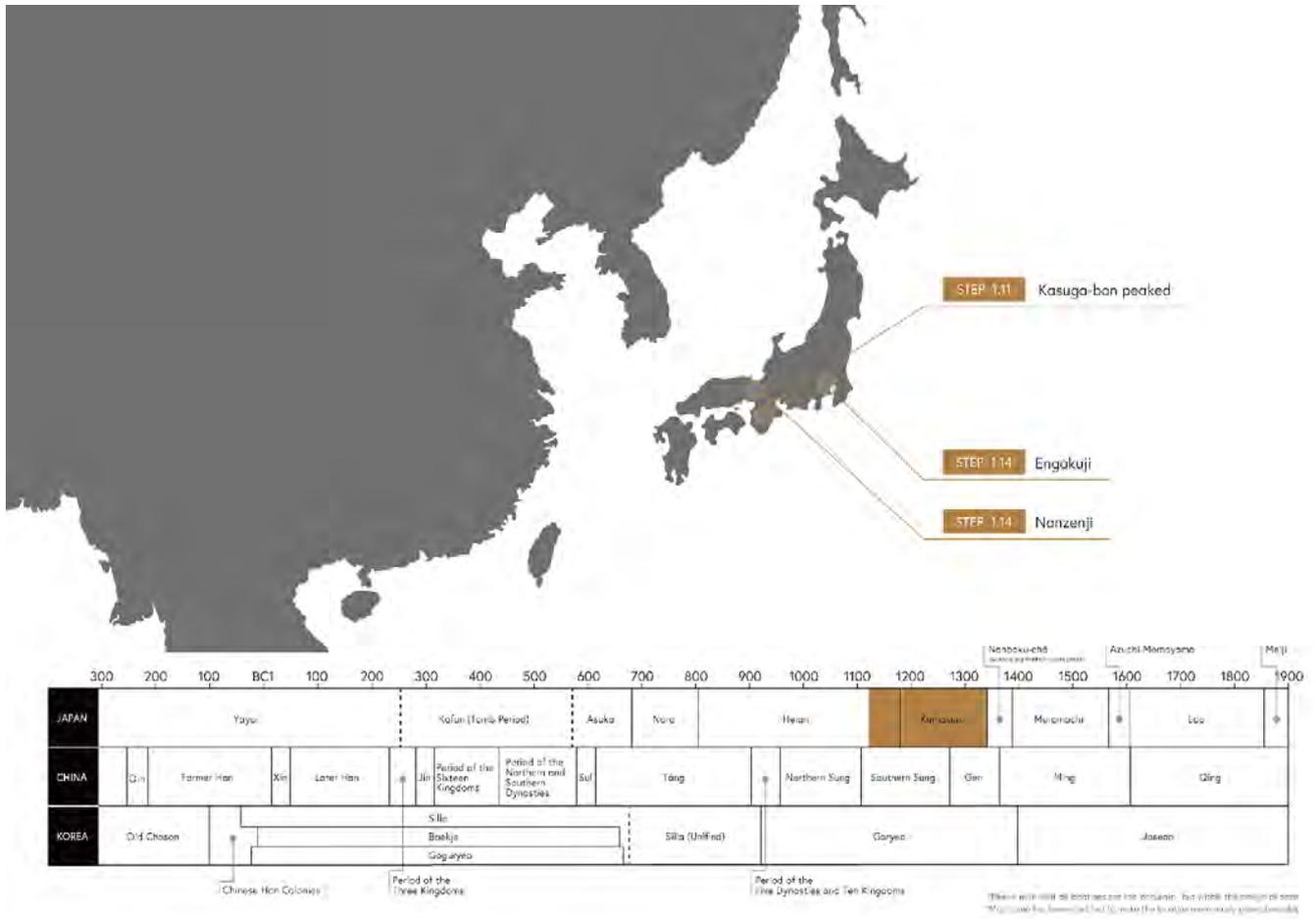
デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」 - <http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/> (日本語)

関連情報

- **中世歴史博物館 神奈川県立金沢文庫 (日本語)**
現在、称名寺に遺された金沢文庫資料は、神奈川県立金沢文庫において管理し、展覧に供されています。公式ホームページURL：<http://www.planet.pref.kanagawa.jp/city/kanazawa.htm>

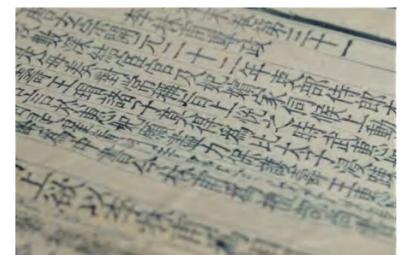
- **デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」**（日本語）
宮内庁書陵部図書寮文庫に伝来した金沢文庫本の漢籍は、デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」において、全文の閲覧が可能となっています。以下URLよりアクセスしてください。
http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_search.php
- **Shomyoji Temple (称名寺)**
横浜市公式ホームページ内称名寺の紹介。訪問時に役に立つ情報が掲載されています。
<http://www.yokohamajapan.com/things-to-do/shomyoji-temple/>

Week 1: Activity 5 中国の文化をうつす

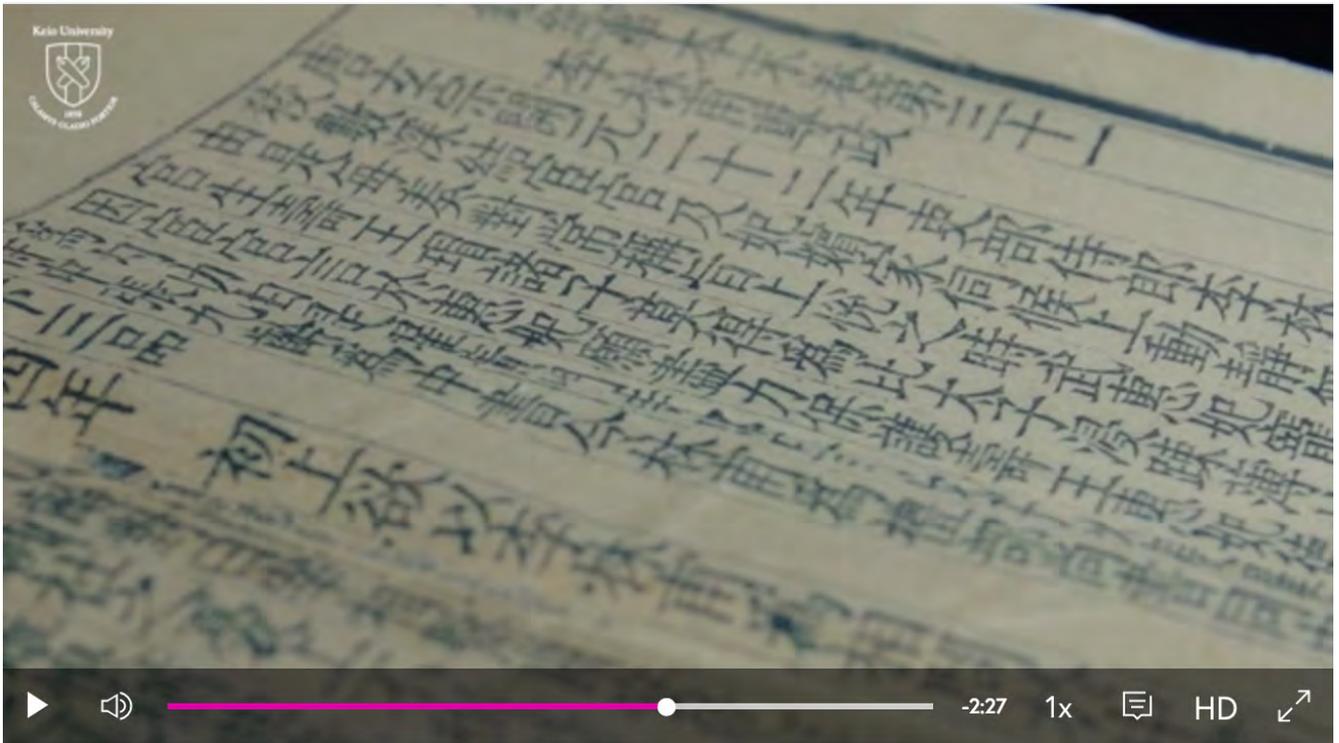


日本中世の禅宗寺院の出版本を「五山版」と呼んでいます。中国文化の仲介役としての禅僧たちについて見ていきましょう。

- 1.14 禅宗の出版物VIDEO (07:03)
- 1.15 刻工集団の来朝ARTICLE
- 1.16 宗教と書籍DISCUSSION



Step 1.14 (Video) 禅宗の出版物



鎌倉時代の禅宗寺院は、書籍文化にとって大変重要な役割を果たしていました。中国文化を日本に伝える役割も担っていました。禅宗寺院の出版である「五山版」について、住吉教授が解説します。

ビデオで紹介した書籍・関連書籍

詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。

http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.14

1. 通鑑紀事本末（つげんきじほんまつ） 257
2. 景德伝灯録（けいとくでんとうろく） 1348、五山版
3. 叢林公論、五山版

ビデオで紹介した寺院

- 建長寺（鎌倉）
- 円覚寺（鎌倉）
- 南禅寺（京都）

ビデオで紹介した歴史上の人物

- 栄西（えいさい）（1141-1215）
- 道元（どうげん）（1200-1253）
- 道隆（どうりゅう）（1213-1278）
- 無学祖元（むがくそげん）（1226-1286）

ビデオで紹介したキーワード

- 胡蝶装（こちょうそう）
- 粘葉装（でっちょうそう）

Video Script

0:04

鎌倉時代に本格化した、中国からの禅宗の移入は、鎌倉幕府の北条氏や、京都では九条家などの支援を得て、比叡山との確執を乗り越えながら発展の道をたどり、京、鎌倉に五山と呼ばれる幕府直営の寺院を構え、南北朝室町時代に隆盛となります。

禅宗は、大乘仏教から中国で派生した独特の教えで、修行や問答を通じた、体験的な悟りを重視しました。

0:38

中でも臨済宗のいくつかの流派では、言葉のイメージ喚起力を借り、文学的な表現を多用します。そして、師匠と弟子が、共同生活の合間に一対一で向かい合い、生活の中で後進を導く教育法をとっていました。逆に、悟りの内容を論理的に説明し、文字を通じて伝えることは、難しいという立場をとります。

日本の禅宗を導いた栄西や道元は、いずれも入宋した留学僧で、大陸で師の印可を得て帰ります。このことは禅僧にとって大切な事柄で、続く弟子達も、中国への留学を目指します。

1:24

そして、禅宗の事情を察知した北条氏は、鎌倉に新設する寺院に、蘭溪道隆や無学祖元など、中国の高僧を招致しました。彼等は建長寺や円覚寺、後には京の南禅寺に入って、直接後進を指導します。これら日中間の人的交流は、禅宗の一つの特色となりました。

そこで、禅僧たちは中国寺院の生活文化にひたり、日本の禅院も中国風の建築様式を採用したり、室内を中国風の調度で飾ったりします。

2:03

また中国通となるばかりか、高度な漢語の理解力を培い、次第に漢学の専門家、漢文の作家としての地位を、確立していきました。こうした条件が、中国文化の特色となっていた、出版文化を日本に導く結果を産み出します。こうして作られた、日本中世の禅宗寺院の出版本は、「五山版」と呼んでいます。

鎌倉時代、日本でも寺院での出版が盛んであったことは、既に述べました。しかしそこには、日本の伝統に従う、二つの制約がありました。一つはその内容が、経論またはその解説、またはそれらを基にした祖師の著作であることです。もう一つは、その様式が、在来の写本の模造であることです。五山版は、これらの制約から離れて作られました。

3:04

五山版の様式は、当時の中国の出版本、宋元版の様式を真似たものです。それは、初めから冊子本の形を想定し、匡郭や界線、版心といった、現代の日本の原稿用紙に近い枠の中に、刻字用に、直線的に変形された書体の文字を並べ、片面刷り谷折りで束ねる形です。中国では、南宋時代に出版文化が発達し、商業的な出版が栄え、出版に適した様式を備えて行きました。禅僧たちが留学した中国の南方は、正にそうした出版を主導していた地域であり、禅宗寺院の出版も、商業出版を直接の背景として行われていたことから、日本の五山版も、宋元版を模造する方向で作られたのです。

4:03

こちらに斯道文庫で所有している通鑑紀事本末(1)の、宋版、宋末の版本です。宋代の版本はこのように一丁をまるまる匡郭と呼ばれる線で区切りまして、それから一行ごとに界線と呼ばれる線を引いていきまして、その中に唐代の名筆家の筆跡を標準とした、しかし彫りやすいように、印刷出版用に様式化された文字を並べてゆきます。日本の和様の出版物とは非常に異なる特色です。書物の装訂としては、紙の片側に印刷をしまして、裏側は刷らない。片面刷りを谷折りにして次々に糊付けをしていく、胡蝶装と言われる装訂。

5:14

日本の粘葉装と構造は同じですが印刷は片側だけという点で異なります。交互で刷った面と刷らない面が表れてくる。蝶が羽を閉じたり、開いたりしているように見えるため、胡蝶装と言います。

こちらが日本の五山版です。日本の五山版は、景德伝灯録(2)という禅宗の書物の出版本ですが、中国で出版された版本をもとにして、日本で複製されたものです。こちらの本も元々は、印刷面を谷折りにした胡蝶装で印刷されていたことがわかっています。ただこの場合は、のちに山折りの冊子本に変更されています。

6:21

この中国式の出版様式を採用しまして、匡郭のなかに界線を引いて、印刷様式の文字を並べていくという版本の様式は中国風に倣ったものとなっていました。これまでに見てきた、日本の和様の出版物とは全く異

なってくるのがわかると思います。今までの日本の出版物は写本の模造という姿勢を貫いてきましたが、新しい禅宗の出版物は宋元版の模造と、模造の対象を切り替えたといえます。

Step 1.15 (Article) 刻工集団の来朝

さて、五山版も、当初は中国の禅僧の語録など、禅籍を取り上げました。(fig.1)



Fig. 1. 国立歴史民俗博物館／禅林類聚

しかし、南北朝時代になり、漢学の専門家、漢文の作家としての地位が確立すると、それを受け継ぐために、辞書や百科全書、中国の古典、文学の名品集、元時代の文集などを出版したのです(fig.2)。



Fig. 2. 蒲室集

詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。

http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.15

これら世俗の書物は、仏教界では「外典」と呼ばれます。具体的には、嵯峨の天龍寺で、元時代の文人范徳機の詩集(fig.3)が出版されたり、別に皇元風雅という当代の詩の名作集が刊行されたりしました。そして南北朝時代の半ば頃、この傾向に拍車をかける出来事が起こります。それは、貞治六年日本僧の勧めにより、中国の福州から、刻工の集団が来朝したことです。

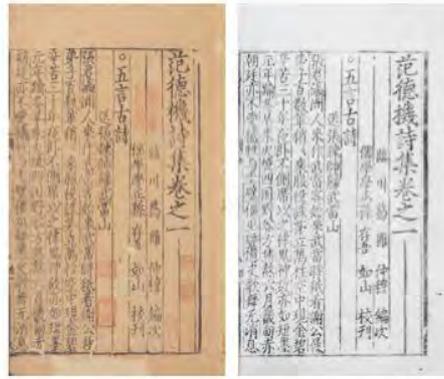


Fig. 3. 范德機詩集の比較（台北・国家図書館、五山版の研究）

刻工とは、出版時に文字の彫刻を担当する職工のことです。記録によると、貞治六年七月に来航した刻工八名が、嵯峨の地に着いたとありますが、この年以降に刊行された五山版にはしばしば、陳伯寿、兪良甫といった、刻工の名が現れます(fig.4)(fig.5)。中国の出版では、印刷面の中に刻工の名や刻字数を彫っていますが、これらは担当者を明示し賃金を計算するためで、出版業の発達していた中国の習慣です。こうして、天龍寺や臨川寺などの禅院が立ち並び、当時五山版刊行の中心であった嵯峨の地で、来朝刻工の出版活動が展開されました。

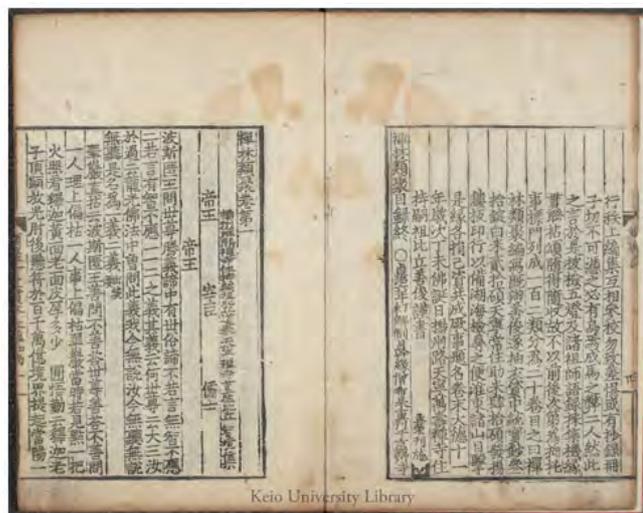


Fig. 4. 禅林類聚（五山版）

詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。
http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.15

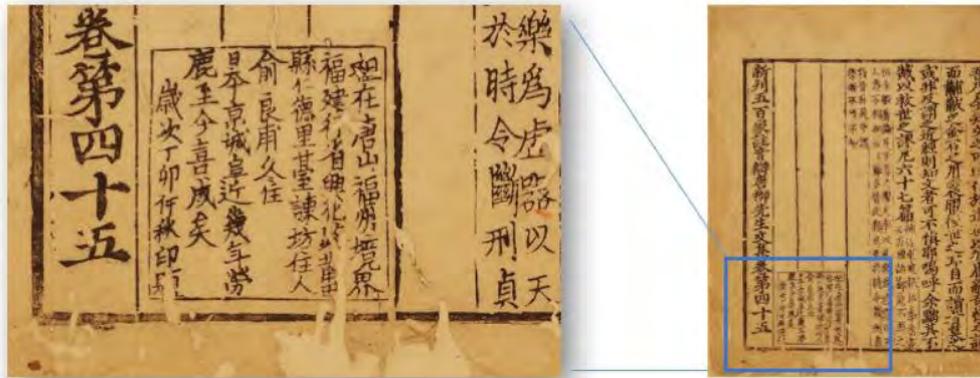


Fig. 5. 国立歴史民俗博物館／唐柳先生文集・刊記

貞治六年という年は、中国では元の至正二十七年に当たり、元朝や地方勢力の大部分が朱元璋の軍に敗れ、翌年に明朝の開幕を控えた年です。実は、台湾海峡の西岸に当たる福州近辺は、元朝の遺臣が最後まで朱軍への服従を拒み、抵抗を保っていた土地ですが、翌年の制圧が迫っている状況にありました。また福州は建安と並び、当時の商業出版の中心地の一つであり、その福州の刻工が、戦乱を避けて日本に亡命してきたという事情のようです。

さて、福州(fig.6)が商業出版の中心であったことは、日本の書籍文化に少なからぬ影響を与えます。それは、来朝刻工たちが、商業的な考え方を持ち込み、独自の出版を展開したからです。もちろん彼等は、禅宗寺院とのつながりの中で出版活動を行い、その読者も多くは禅僧でしたが、俗人である刻工たちの意志により、中国の古典である儒経や道家の書、文集や辞書、百科全書など、仏典ではない漢籍が出版され、漢学者としての五山僧の需要を満たしていったのです。これは、寺院の専属であった従来の出版機構とは異なり、半独立の立場から、実験的な商業出版を行ったのに等しい内容でした。



Fig. 6. 現在の福州閩江

日本の書籍文化は、来朝刻工の蒔いた種を育て、近世に至り商業出版の花を咲かせることになります。五山文化は、喫茶や沐浴、味噌醤油、饅頭などの飲食、書院造りの室内空間や池水石庭、水墨画や挿花、盆栽の装飾と鑑賞など、中国の影響下に、日本の生活文化を様々に革新しましたが、読書文化の変革についても、大きな足跡を遺したのです。

Step 1.16 (Discussion)

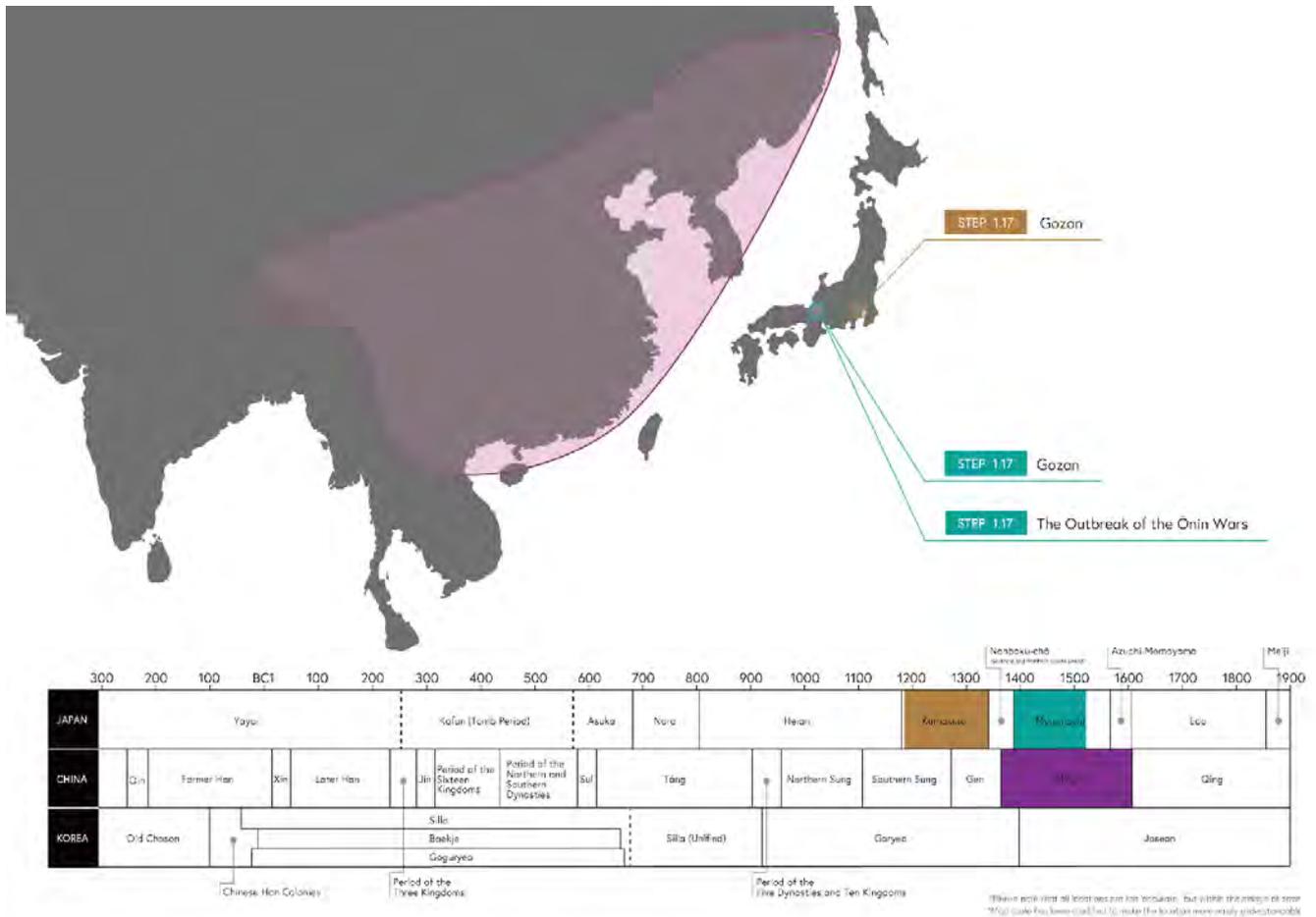
宗教と書籍

ここまでで、日本文化の中で書籍文化がどのようにはじまり醸成されていったのかを学んできました。東アジアにおける書籍文化と宗教の関係について考えてみましょう。以下のような観点についての意見をコメント欄に書き込んでください。

- 東洋の文化圏において、宗教と書籍は、知識という観点から見て、どのような関係にあったと言えますか？
- 書籍文化を牽引してきたのはどのような人たちだったのでしょうか？
- あなたの文化圏についてはどうですか？

他の受講者のメッセージを読み、コメントを書きましょう。あなたが投稿したコメントに対する返事や Like は、画面右上にあるベルの通知アイコンをクリックすることで確認することができます。また、他の方のメッセージで面白いとおもったものや、同意します、などの意思表示として、“Like” ボタンを押してみましょう。

Week 1: Activity 6 実用品としての版本



五山僧は、五山版による学習で培った学力を、寺院での活動ばかりでなく、中国通の知識人として、武家の諮問に答えるなど、世俗の活動に用いていました。ここでも出版が大きな役割を果たします。



1.17 五山僧の移り変わりARTICLE

1.18 戦国大名による地方版VIDEO (04:49)

Step 1.17 (Article)

五山僧の移り変わり

五山僧は、五山版による学習で培った学力を、寺院での活動ばかりでなく、足利幕府との強い関係により、中国通の知識人として、武家の諮問に答えるなど、世俗の活動に用いていました。

とくに、天龍寺船や勘合船など、日元、日明間の貿易を目的とする外交団の派遣には、五山僧が外交文書を起草したばかりか、五山僧自身が使節として同行しました。このように室町時代には、五山僧は漢文を操る人材として、世俗的用務に活躍します。

一方、室町時代前期までに、五山版の刊行は一段落を迎えます。これは、世代が移り来朝刻工の活動が少なくなったことと、日明貿易の発展により、中国の書籍が流通し始めたことも背景にあります。五山僧の学問の範囲が定まり、書籍普及にも飽和状態の生じたことが、主な原因と思われます。

しかし、京都を中心に日本中を巻き込んだ応仁文明の乱が起こると、五山僧の活動にも変化が兆します。まず一つには、足利氏の権威が低下し、政治経済的な求心力が衰えます。その代わりに、各地の守護が領国への定着と開発に力を注ぎ、細川氏や大内氏など、貿易に関わる港を押さえていた大名は、その権益を私して、領国の繁栄を誘導し、戦国大名となりました。そこで禅僧たちも、戦国大名との関係を深めるために、その領国に下って活動するようになります。またもう一つには、五山僧自身の世俗化が進んで、仏事が儀礼的となる一方、むしろ漢学の専門家、教師として僧籍を離れ、還俗する者が現れます。

Step 1.18 (Video)

戦国大名による地方版



室町時代にはいると、書籍の出版は京都だけでなく地方の大名によっても盛んに行なわれるようになってきます。また、その内容も多岐にわたってきます。住吉教授が室町時代の重要な書籍文化の特徴を解説します。

ビデオで紹介した書籍・関連書籍

(※) 詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。
http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.18

4. 碧巖録（へきがんろく）（※）
5. 天文版論語（てんもんぼん・ろんご）2冊（※）
6. 聚分韻略（しゅうぶんいんりやく）五山版
7. 医書大全（いしょたいぜん）明朝
8. 四体千文書法（したいせんせんぶんしょほう）天正
9. 節用集（せつようしゅう）天正
10. 歴代序略（れきだいじよりやく）駿府今川家が出版した書籍の例（※）

ビデオに登場した中国・日本の時代名

英語字幕では時代名に(*)マークをつけてあります。
 詳細は Step1.3「東アジアの歴史年表」をご覧ください。

- 日本：奈良時代 (710-794)
- 日本：鎌倉時代 (1185-1333)
- 日本：室町時代 (1392-1573)
- 日本：天文（室町時代） (1532 - 1555)
- 日本：天正（安土桃山時代） (1573-1593)
- 中国：明 (1368-1644)

Video Script

0:04

この時節に、出版文化の新たな局面として、地方での出版という現象が出てきます。鎌倉時代以来、畿内の大寺院を模範とする寺社での仏典刊行が続いており、散発的ながら、地方版にも相応の伝統があります。しかし、五山僧が守護大名の領国で行った室町時代の出版には、形式にも内容にも、新たな要素が含まれていました。

まずその刊行地は、経済力を蓄えた城下町や港町で、細川氏の堺、大内氏の山口、島津氏の薩摩、今川氏の駿府、朝倉氏の一乗谷などが挙げられます。

0:51

とくに堺は、南北朝時代から出版の事蹟がある上、室町時代には日明貿易の恩恵に浴し、大商人や医者など新興の知識人を擁し、特色ある出版を展開します。

室町時代の地方版によく取り上げられた書目は、碧巖録(1)、論語(2)、聚分韻略(3)の三種です。こちらが碧巖録の室町時代の版本ですけれども、碧巖録は臨済宗のもっとも基本的な書籍です。これは禅宗の教化のために、各地方で出版が勧められました。一方の論語は、当時の世俗的教養の基本というべきもので、漢籍外典の代表です。例えばこちらは室町時代の天文8年に堺で出版された天文版論語と言われる版本です。

1:56

また聚分韻略は、虎関師錬という鎌倉時代末の五山僧の著作ですが、その内容は辞書的一种で、詩や聯句の作成に必要な参考書、文学方面の実用書です。またこの時代の版本は、片面刷り袋綴じの和装本の装訂を、すでに獲得していました。

堺では、五山版の影響を受け漢籍外典の出版を行いました。五山だけではなく、公家流の博士家である、清原家関係の漢籍を刊行し、とくに論語は何度も出版しています。これは、出版が世俗の立場に移りつつあることを示しています。また医書大全(4)という明代の医書を、新たに到来した明版を用いて重版しました。

2:51

医書の出版は、朝倉氏の一乗谷でも試みられていますが、室町時代後期の出版に加わった、実用書の刊行という要素をよく代表しています。

また当地では、天正年間に「経師屋」と名乗る石部了冊という人物が、四体千文書法(5)、節用集(6)などを出版します。経師とは、奈良時代には写経所の写経生を指しましたが、中世には摺経を行って仏典の印刷や装訂に関わる、寺院所属の職工を意味しました。石部氏もその伝統を受け継ぐのでしょうか、

3:22

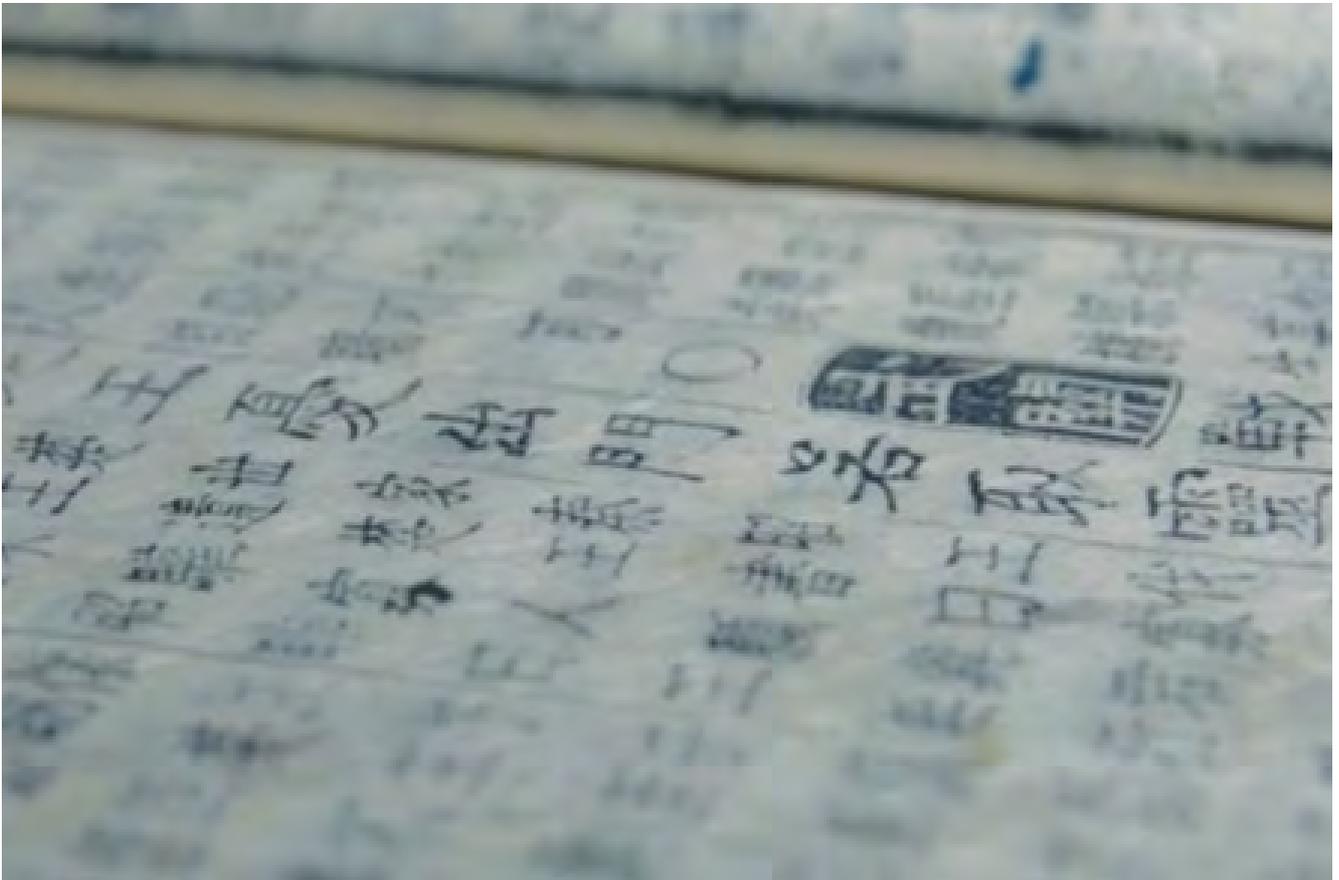
出版された千字文は識字の初歩であり、節用集は、漢語および日本語の基礎知識を得るための辞書であって、全く世俗の実用書です。そして、経師屋として実用書の出版を行ったのは、商品として供給する目的であったと見られます。

このように、室町時代後期の出版は、五山版の開拓した書籍文化を受け、戦国大名の治める各地方に展開し、近世を迎える頃には、世俗実用書の商業的出版を行うようになっていました。これは、五山の学問と出版が、世俗の方向に踏み出したことにより、漢学の一般への普及、識字の広がりをもたらす結果となったもので、五山の活動が長く日本の文化に影響を与えた項目の一つと言えます。

4:35

そこには商業出版の萌芽も現れていましたが、それが全面的に発展するためには、もう一段の、海外からの刺激を必要としました。

Week 1: Activity 7 商業出版への助走



日本は、江戸時代にさしかかるころ、朝鮮から活字版印刷技術を学びます。日本の書物出版の発展に、ここでも海外からの職人が大きな役割を果たします。

- 1.19 朝鮮出兵と印刷技術VIDEO (04:26)
- 1.20 活字版印刷VIDEO (07:16)
- 1.21 第1週のまとめ DISCUSSION

Step 1.19 (Video) 朝鮮出兵と印刷技術



近世の始め、再び日本の書籍文化に大きな影響を与える事件が起こります。住吉教授が解説します。

ビデオで紹介した書籍

(※) 詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。
http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.19

1. 詳説古文真宝大全後集（朝鮮）（※）
2. 史記（※）
3. 孝経（こうきょう）文禄
4. 蒙求（もうきゅう）文禄
5. 勸学文（かんがくぶん）慶長
6. 四書（ししよ）慶長
7. 錦繍段（きんしゅうだん）慶長
8. 日本書紀神代巻（にほんしよき）
9. 新刊大字附音釋文三註（朝鮮）（※）

ビデオに登場した時代名

英語字幕では時代名に(*)マークをつけてあります。
詳細は Step1.3「東アジアの歴史年表」をご覧ください。

- 中国：唐 (618 - 907)
- 朝鮮：李氏朝鮮 (1392-1897)
- 日本：文禄（安土桃山時代） (1592-1596)
- 日本：慶長（安土桃山～江戸時代） (1596-1615)

ビデオに登場した人物

- 豊臣 秀吉 (1537-1598)
- 徳川 家康 (1543-1616)
- 小瀬 甫庵 (1564-1640)
- 後陽成天皇 (1571-1617)
- 世宗大王 (朝鮮) (r. 1418-1450).

ビデオに登場したキーワード

- 甲寅字
- 初鑄甲寅字
- 衛夫人体

Video Script

0:04

近世の始め、再び日本の書籍文化に大きな影響を与える事件が起こります。それは、二度にわたる朝鮮への出兵、いわゆる文禄慶長の役です。この時、日本の軍勢は多くの戦利品を持ち、捕虜を連れ帰っていますが、戦利品には多くの書籍が含まれていました。韓半島では早くから、出版印刷による書籍文化が開かれていましたが、とくに朝鮮時代には、王朝の主導で書籍の印刷と普及が図られていたのです。

その方法は、中央で数種類の金属活字を造り、宮廷の蔵書を基にして必備の書を印刷し、高級官僚に配布したり、各地方に赴任する行政官に托し、地方の資材を集め、基本図書を木版印刷で普及するよう指導したりしました。そうして印刷された書籍を、日本では「朝鮮版」と総称しています。

1:09

このうち中央の活字印刷本はいずれも、優美な書体と高度な技術による整った仕上がりの尤品で、縦30cmを越える大振りな判型と相俟ち、東洋の書籍文化に光彩を放っています。朝鮮王朝の出版印刷は、正に文治の象徴と言えます(1)(2)。

日本の軍勢がこれらの書籍に関心をもったのは、外交折衝役として五山僧が同行していたからだと言われています。その結果、退陣した戦国大名の下に多くの朝鮮版がもたらされ、さらに、支配的地位にあった豊臣家や徳川家、書籍に関心をもっていた寺院や医師に贈られて、次第にその影響が現れて行きます。

2:01

いち早く耳目を集めたのは、やはりその活字印刷技術でした。すでに文禄年間に後陽成天皇の宮廷で、孝経(3)の活字印刷を行ったという記録があります。また文禄五年には実際に、医師で豊臣家に仕えた小瀬甫庵により、初学者向きの漢籍である蒙求(4)が刊行されています。後陽成天皇の周辺でも、慶長年間となつてから、勸学文(5)、四書(6)、錦繡段(7)、日本書紀神代卷(8)など活字印刷を行い、その刊記には、朝鮮の技法によったことが、明記されています。

3:00

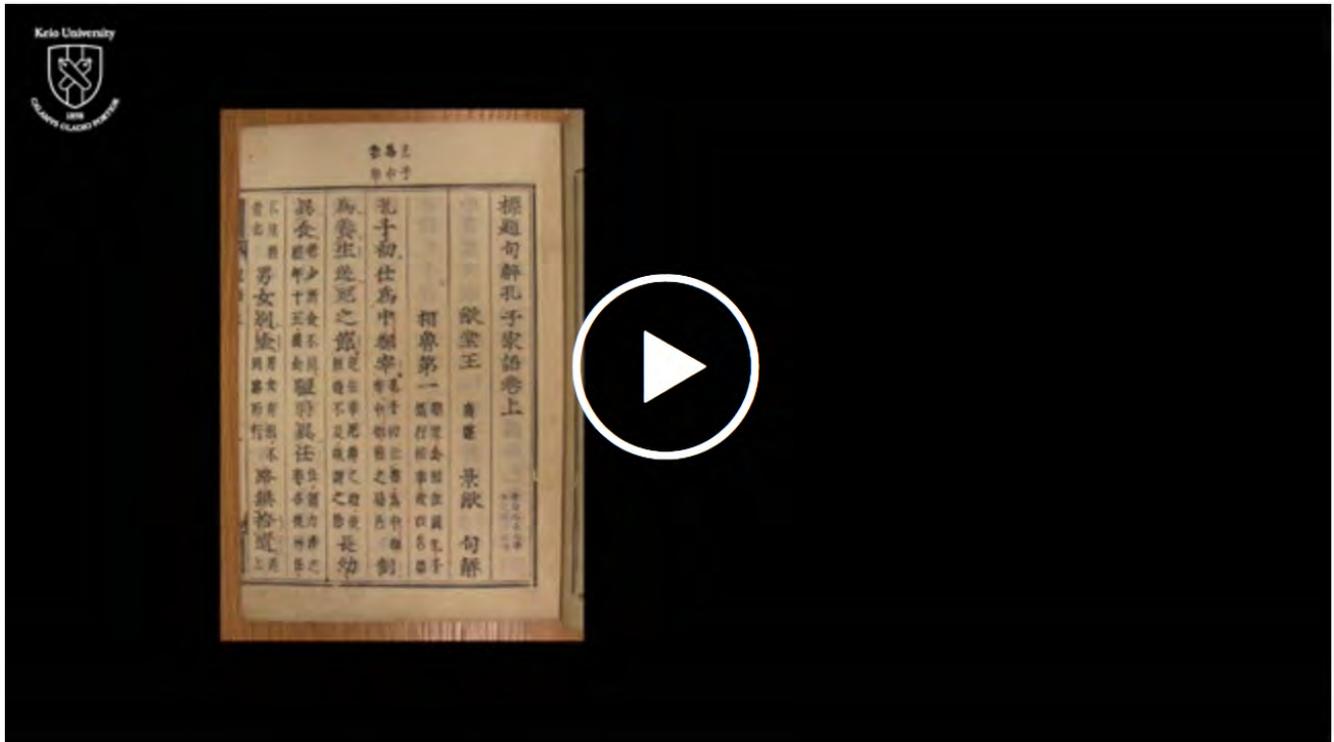
こちらの書物は、朝鮮で出版された三註(9)という初学者向きの漢籍の叢書なのですが、こちらは朝鮮王朝が15世紀、世宗大王の時代に作成した甲寅字、初鑄甲寅字でもって印刷された書物というふうに鑑定されています。初鑄甲寅字は衛夫人体といわれる優美な楷書をもとにして、銅を中心とした金属をもとにして作成した活字を用いています。多少印刷面に濃淡が表れているのは、金属によって印刷することから、多少墨のノリに斑が出来ることが見て取ることが出来ます。活字印刷本というのは、そうそうたくさん出版されることではなくて、ある程度数を限って印刷し、それを王朝の主要な立場にある官僚たちに配る。それをもとにさらに普及を図るといふ、書籍普及のシステムを構築していたわけです。

4:14

そういう朝鮮朝の出版物、印刷本が文禄慶長の役の時に大量に日本に流入してまいります。

Step 1.20 (Video)

活字版印刷



朝鮮伝来の活字印刷術は京都から急速に日本各地へ広まってきました。

近世日本の書籍文化の発展には、江戸時代の初代将軍である徳川家康が大きな役割を果たしました。住吉教授が活字印刷の発展とその影響について解説します。

ビデオで紹介した書籍

(※) 詳しい書籍情報と高画質画像は特設サイトをご覧ください。
http://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week1_all.html#1.20

1. 孔子家語（こうしげご）3世紀
2. 貞観政要（じょうかんせいよう）中国・唐
3. 三略（さんりやく）中国・漢
4. 伊勢物語（いせものがたり）10世紀
5. 徒然草（つれづれぐさ）1332
6. 古文真宝（こぶんしんぼう）
7. 本朝文粹（ほんちょうもんずい）1629（※）
8. 増続会通韻府群玉（ぞうぞくかいつういんぶぐんぎよく）
9. 群書治要（ぐんしょちよう）1616（※）

ビデオに登場した時代名

- 日本：室町時代 (1392-1573)
- 日本：文禄（安土桃山時代） (1593-1596)
- 日本：慶長（安土桃山～江戸時代） (1596-1615)
- 日本：寛永（江戸時代） (1624-1645)
- 中国：唐 (618 - 907)

ビデオで紹介された人物

- 三要（さんよう）あるいは閑室元佶（かんしつげんきつ）(1548-1612)
- 天台僧・宗存（しゅうぞん）
- 吉田（角倉）素庵（よしだすみのくらそあん）(1571-1632)
- 中村長兵衛尉（なかむらのちょうべい）
- 本屋新七（ほんや・しんしち）
- 田中長左衛門（たなか・ちょうざえもん）
- 林羅山（はやし・らざん）(1587-1653)
- 以心崇伝（いしん・すうでん）(1569-1633)
- 林五官（りん・ごかん）

ビデオで紹介されたキーワード

- 伏見円光寺（ふしみ・えんこうじ）
- 古活字版（こかつじばん）
- 日蓮宗（にちれんしゅう）
- 天台宗（てんだいしゅう）
- 北野経王堂（きたのきょうおうどう）
- 嵯峨本（さがぼん）
- 甲寅字（こういんじ）
- 乙亥字（いつがいじ）

Video Script

0:04

朝鮮伝来の活字印刷術は、慶長年間、京都を中心に急速な広がりを見せます。中でも本格的に取り組んだのは、五大老の筆頭として伏見に駐留していた徳川家康です。家康は関ヶ原の戦いに前後する時期、伏見円光寺の僧三要、すなわち閑室元佶(*)に命じて、孔子家語(1)、貞観政要(2)、三略(3)などの、治世に必要なとされた漢籍を活字で刊行させました。これらの刊本を「伏見版」と呼びます。

0:40

文禄、慶長の勅版や、伏見版など、近世初期に刊行された活字印刷本を「古活字版」と称しています。朝鮮由来のこの印刷法は、一組の活字を備えれば、工夫次第で様々の本を産み出すことができ、その簡便さが、これまでの木版印刷にない長所でした。活字印刷の流行は、室町時代までに成熟していた、知識への足掛かりの上に、ちょうど触媒のように働いて、多数の刊行者と読者を引きつけます。

寺院の中でも、室町時代から京都に地盤を築いていた日蓮宗の僧が、古活字版によって出版界に参入します。

1:27

天台宗でも、北野経王堂(*)の宗存(*)が、活字による大蔵経の刊行という大志を抱いて活動を始め、寛永年間まで刊行を継続しました。

また吉田素庵(*)が刊行させた「嵯峨本」(*)は、平仮名交じりの連続活字と、雲母引文様の華麗な染紙を用い、伊勢物語(4)や徒然草(5)、謡本など、和語中心の古典を初めて刷り上げました。これは朝鮮由来の技術に、日本文化の創意を加えて急速に応用した、美術的印刷品です。

2:06

さらに重要な点は、書籍の印刷と販売を生業とする、書肆（しょし）が現れてくる点です。例えば、慶長十三年に「富小路讃州寺町」で禅籍の刊行を行った「中村長兵衛尉」(*)は、商家を思わせる名乗りをもっており、また翌十四年に古文真宝(6)を刊行した「室町通近衛町」の「本屋新七」(*)の場合、その性格を疑う餘地はありません。

こちらは、古活版の時代に刊行された本朝文粹(7)という書物の一伝本ですが、この本の内容は日本の平安時代の貴族の漢文学、これを集めたアンソロジーです。長らく写本で伝えられたものが、この古活版の時代になり始めて刊行されるに至りました。

3:28

ところが出版をしている文字セット、活字のスタイルというのは全く朝鮮朝の活字、こちらにあるのは甲寅字(*)という活字ですが、こちらはむしろ乙亥字(*)という別の活字に類似していますけれど、まったくそのスタイルを負っているものです。

この本には刊記が残されており、寛永六年に京都の玉屋町の田中長左衛門(*)がこれを刊行したと記されています。この田中長左衛門は他にも、いくつも古活字本を刊行しています。これは明らかに出版業を生業とする、そういう人物だと思えます。この田中長左衛門が刊行したという記録はあります。この田中長左衛門の出版物の一つに、増続会通韻府群玉(8)という辞書があります。こちらは実は朝鮮版の乙亥字本が先に存在していて、それをそのまま複製することによって、辞書の複製をすることによって活字1セットを手にして、それを使いさらに中国や日本の古典を、植字をして印刷をしていくということをおこなった人です。

4:57

そういう出版業がこの古活字本によって本格的に行われるようになったということが言えると思えます。

古活字版の時代はおよそ五十年、寛永年間を以て終息していきます。その理由は様々に推測されていますが、商業出版の進展によりかえって、木版彫刻の自由さと、版木による保存の機能が再評価されたため、と考えることができます。しかし、京都を中心とする商業出版の勃興や、読者の誕生について、古活字版の果たした役割は、極めて大きなものがありました。日本の出版文化は、これ以降、江戸時代に開花したと言えます。

5:48

さて、伏見版を刊行した徳川家康は、江戸開府の後、將軍職を譲って駿府に入り、自由な立場に立つてからもなお、活字印刷への情熱を保っていました。家康は、側近の林羅山(*)と以心崇伝(*)に命じ、こんどは金属活字を鑄造させ、大部な群書治要(9)などを刊行します。これらの刊本は「駿河版」と呼ばれ、その活字も現存していますが、当時の記録によると、駿河版活字の鑄造には、林五官(*)という外国人が協力していました。林氏は朝鮮人とも明人とも判断がつきませんが、伏見版の時代から、家康の活字印刷事業に関っていたようです。

6:39

このように、出版印刷を中心として日本の書籍文化の歩みを顧みる時、商業出版の開花する近世初期までのいくつかの局面で、外国人職工の技術導入が、大きな意味をもってきたことが知られます。時々の社会の激動に翻弄されながら、日本に生きる場所を求めた東アジアの職工たちが、日本文化の形成に果たした役割についても、私たちは記憶に止めておくべきではないかと思えます。

Step 1.21 (Discussion)

第1週のまとめ

日本の書籍文化と印刷技術の歴史をめぐる旅はお楽しみいただいたでしょうか？この週では、そのはじまりから江戸時代の幕開けごろまでを学んできました。その重要な過程で日本が中国・朝鮮から多くのことを学び、文化を発展させてきたことがおわかりになったと思います。

第1週のまとめとして、東洋の近世までの社会において印刷技術が時々そのような役割をはたしてきたかを振り返ってみましょう。例としてあげた以下のような観点から意見をコメント欄にお書きください。

- 日本の書籍文化と印刷技術に関連して、中国から受けたもっとも大きな影響は何だと思いますか？
- 日本の書籍文化と印刷技術に関連して、朝鮮から受けたもっとも大きな影響は何だと思いますか？
- 日本の書籍文化と印刷技術に関連して、禅僧が果たした役割は何だと思いますか？
- 五山版、春日版、伏見版の、社会における役割はそれぞれどのようなものだったと思いますか？
- ご自分の文化圏における書籍文化と較べてどうでしょうか？他の地域からの影響を大きく受けた歴史がありますか？

皆さんの意見をDiscussion欄に書き込み、他の学習者の意見も読んでみましょう。また、同意する、気に入った書き込みには‘Like’を押したり、返事をしたりしてみましょう。

次週について

第2週は、日本において現在まで最も長く読み継がれているベストセラーといっても過言ではない「論語」を取り上げます。論語は孔子の教えを伝える書物ですが、孔子は、古代中国の師であり、政治家であり、哲学者でもある人物です。この古代の教えがどのように日本に到来し、広く読まれるまでになったのか、また、日本の社会にとって論語はどのような存在であり、どんな影響を与えたのかについて紐解いていきます。